座キューピーマジック上演台本

黒いスーツのサンタクロース

作・演出●田窪一世

登場人物

森田由紀子（女優）

森田友則（その弟）

坂本雄二（演出家）

中村真理子（女優、坂本の妻）

高林聡子（由紀子の事務所の女社長）

吉村正志（求婚者、食品会社社員）

野川幸子（由紀子の友人）

隣の女

新聞勧誘員

裕子（劇団研究生）

弘美（劇団研究生）
千佳（劇団研究生）
舞台監督

魔法使いの老婆
死神たち
白い仮面の女たち
デニス・グッド（死神）

《装置》

舞台の上は由紀子のアパート、稽古場、路上の三つの層で構成されている。舞台奥中央には八畳程度の広さの由紀子の部屋。暖色系の壁。フローリングの床。舞台奥上手寄りに大きめの窓。下手寄りに玄関ドア。部屋の中央には小振りのソファセット。その他、チェスト、電話台、オイルヒーター等。室内は全体的にカントリー風のイ

ンテリアでまとめられている。舞台下手奥寄りは楽屋スペース。寒色系の壁。フローリングの床。舞台下手奥の壁に姿見。この姿見は2場で浮かび上がる真理子。3場の魔女。8場での真理子と雄二のそれぞれが鏡の向こうに現れる場面でも使用される。その下手側に通路口。その手前の壁には化粧前。三つ並んだ化粧鏡。折り畳み椅子が三脚。奥行き半尺のテーブルの上には化粧道具が散乱している。下手手前のスペースにハンガーに掛かった何着かの舞台用衣装、小道具箱、その他。通路口は由紀子の部屋のキッチンへ続く通路口と兼用される。舞台上手前及び舞台前面は路上。上手前の黒壁は舞台内側に折り畳まれると古い病院の正面玄関にもなる。

由紀子のアパート。クリスマス・イブ。誰もいない由紀子の部屋の電話が鳴る。ベルが２回鳴って留守番メッセージに切り替わる。

由紀子の声　はい、森田です。せっかくお電話いただいたんですが、ただいま留守にしています。ご用の方は、ぜひ、お名前とお電話番号を録音してください。折り返しこちらからお電話します。

メッセージの途中、下手手前の路上にスーツ姿で携帯を耳に当てた吉村正志が現れる。ピーッという発信音。

正　志　（気取った口調で）やあ、由紀子、メリークリスマス。わかるかい？　僕だよ、吉村正志。今夜はクリスマス・イヴだね。そこで、僕からのささやかなプレゼントを貰って欲しいと思って電話したんだけど、どうやら留守みたいで、正志くん、ちょっぴりロンリー。明日あらためて連絡するよ。プレゼントの中身、今夜ベッドの中で、あれこれ想像しながらスリーピング。フフフッ、じゃあ、お休み。吉村正志から僕の大切な由紀子へ愛をこめて。

携帯を切り、小さなガッツポーズを決めて上手前から退場していく吉村。短い間。由紀子の部屋のドアが開いて森田由紀子が入ってくる。コートを着たまま玄関先でドアにもたれかかりしばらく放心状

態で動けないでいるが、何かを吹っ切るように大きな溜息をつくと、てきぱきと部屋の明かりを点け、コートを脱ぎ、留守番電話のボタンを押してからキッチンへ消える。電話のスピーカーから若い女の声が聞こえてくる。

幸子の声　（事務的に）もしもし、幸子です。今夜、毎年恒例の「女優たちだけのクリスマス・パーティ」を開催します。時間、場所は先日ファックスさせていただいたとおり、変更はありません。会費等、すでに納めて貰っていますので必ずおいでになってください、それでは。

ピーッと発信音が鳴る。続いて中年女性の声でメッセージが聞こえてくる。

聡子の声　（猫なで声で）もしもし、オフィスJの高林です。もしもーし、ゆきちゃん、帰ってる？　きょうは、ほんとにごくろうさま。そして、ありがとう。たったいま、プロデューサーの関口さんから電話があったわ。来年の春のレギュラー、決定したそうよ。また一歩、私たちの夢が実現へ向かって大きく前進しました。これからも二人三脚で頑張って行きましょう。それでね、関口さん明日もう一度あなたと会って打ち合わせしたいんだって。えー、明日夜七時に、赤坂プリンスホテルの……、

電話の停止ボタンを押す由紀子。「メッセージを消去しました」というアナウンス。由紀子の片手にはウィスキーの瓶と氷の入ったグラス。

正志の声　やあ、由紀子、メリークリスマス。わかるかい？　僕だよ……。

すぐにボタンを押す由紀子。再び「メッセージを消去しました」というアナウンス。ソファに腰かけウィスキーをグラスに注ぐ由紀子。

由紀子　最低のクリスマス・イヴ。

と言って、ウィスキーを一息で飲み干す。ドアチャイムが鳴る。無視して再びグラスにウィスキーを注ぎグラスをあおる由紀子。再びドアチャイムの音。

由紀子　はーい。

面倒くさそうに立ち上がり、玄関ドアを開ける由紀子。ドアの向こうにはひとりの中年男が立っている。黒いスーツに黒いネクタイに黒い靴。黒い鞄を抱えて満面の笑顔で由紀子に対面している。が、由紀子は男に気がつかない。

由紀子　どちらさまですか？

ドアの外に出ていく由紀子。あわてて由紀子の脇をすり抜けて部屋の中に入ってくる中年男。

由紀子（ドアの向こうで）ハハハ、怪奇現象？　それともただのいたずら？　どっちでもいいけど、わたしのことはほっといて。

ドアを閉める由紀子。ソファの端に行儀よく腰かけている中年男。

ソファに戻りかけたとき、三たびドアチャイムが鳴る。

由紀子　なんなの、いったい。

乱暴にドアを開ける由紀子。するとそこには貧相な身なりの男。おどおどしながら上目遣いに由紀子を見上げている。

由紀子　なんですか、さっきから何度も何度もドアチャイム鳴らして。

新聞勧誘員　（うろたえて）い、いえ、自分は、いま初めて……。

由紀子　え？

新聞勧誘員　いま、初めてドアチャイムを。

由紀子　初めて？

新聞勧誘員　はい、一回しか鳴らしてません。

由紀子　ごめんなさい、わたし勘違いして。あの、じゃあ、なにかご用ですか？

新聞勧誘員　あ、はい、あの……。

由紀子　ええ。

新聞勧誘員　新聞取っていただきたいんですけど。

由紀子　（顔がこわばる）……。

新聞勧誘員　だめですか？

由紀子　ごめんなさい、いま、そういう気分じゃないんです。

新聞勧誘員　新聞取る気分じゃないってことですか？

由紀子　とにかく今日は帰ってください、お願い。

新聞勧誘員　あ、はい。

由紀子　すいません、また、今度に。

男を押し出してドアを閉める由紀子。

由紀子　（ソファに腰かけて）どうせ、クリスマス・イヴにわたしの部屋にやってくるのは、新聞勧誘員かセールスマンよ。

中年男　ご同情申し上げます。

思わず横を向く由紀子。目の前にいきなり男の姿を発見してパニックになって飛びのく由紀子。身構えて、

由紀子　だ、誰？

グッド　ああ、やっと見えるようになりましたか、よかったよかった。

うれしそうに答える小太りの中年男。

由紀子　あなた、いつからそこにいるんですか？

グッド　あ、さきほどから。

由紀子　不法侵入ね。

グッド　いえ、ちゃんとドアチャイム鳴らしましたよ。

由紀子　ドアチャイム鳴らした？

グッド　あなたが開けてくれたんですよ。まあでも、さきほどはわたしの姿が見えなかったみたいで。

由紀子　……。

グッド　ああ、でもだいじょうぶです。死期が近づいてくればちゃんと見えるようになりますから。

由紀子　なにが近づいてくるって？

グッド　ええ、死期、つまり「命の終わるとき」ですね。

由紀子　誰の命が終わるんですか？

グッド　もちろんあなたのですよ。

由紀子　なに変なこと、あなたいったい誰なんですか？

グッド　死神です。

由紀子　しにがみ？

グッド　あ、でもこれ総称ですから、総称。ですから今後わたしのことは「デニス・グッド」と呼んでください。まあ、あなたがお亡くなりになるまでの短い間ですけど、どうせだったら気持ちのいいおつきあいにしたいですものね。

由紀子　（我が意を得たり）わかったわ！

グッド　ああ、そうですか、気に入っていただけてうれしいです。まあ、たあいのない語呂合わせなんですけどね。ほら、死神を英語で言うとデス・ゴッドでしょ。ですからこれをちょいとひねりましてね、デス・ゴッド、デス・グッド、デ……、デニス・グッド、なんてね。

由紀子　あなた、セールスマンでしょ。

グッド　いえ、「セールスマン」じゃなくて「デニス・グッド」です。

由紀子　どうせわたしの部屋にやってくるのは新聞勧誘員かセールスマンよ。それで、いったい何を売りに来たの？

グッド　いえ、これ商売じゃないんですけど。
由紀子　（得意そうに）生命保険でしょ？
グッド　せいめいほけん？
由紀子　なるほどよく考えたなあ。
グッド　どういうことでしょう？
由紀子　死神だなんて言って。
グッド　デニス・グッドと呼んでください。
由紀子　わたしが死にたくないってパニックになったりしたら、それこそあなたの思う壺ね。だけど、わたしはこういうときに取り乱したりおびえたりするタイプの女じゃないの。残念ね当てが外れて。
グッド　森田さん、あなた勘違いなさってます。わたしは本物の死神……、
由紀子　勝手に入ってきたことについては目をつぶって見なかったことにしてあげるわ。だからさっさと帰って！
ドアチャイムが鳴る。
由紀子　もう、またドアチャイム、今度は宗教の勧誘だわ。さあ、あなたの番は終わり、どうぞ入れ違いに出てって！

グッド　そんな、あの、まだ終わってないんですけど。
由紀子　（ドアを開けて）あの、勧誘ならお断り……、
隣の女　あら、森田さん、ぐふふふっ。
ドアの外に立っていたのは隣の女。センスの悪い華美なドレスを身にまとい、ガマガエルのような声でグフグフ笑う。
由紀子　あ、山口さん、あの、実は……、
隣の女　ちょっと、いい？
由紀子　いえ、ちょっと待ってください！
ズカズカと上がってくる隣の女。
隣の女　悪いんだけど、アレ貸してくれない？
由紀子　あ、あれ？
隣の女　ワインの栓抜き、ぐふふふっ。
由紀子　ああ、はい。
隣の女　わたし、去年はひとりぼっちだったんだけど、今年はどういうわけだか大勢集まっちゃってねえ、準備だけでも大変なのよ、ぐふふふっ。
由紀子　そうですか。

隣の女　ああ、いいのいいの勝手に探すから、どうせキッチンでしょ？

下手奥通路口に行こうとする隣の女。

由紀子　あ、ちょっと山口さん。

隣の女　（戻って来て）わたしもうっかりしてたのよ。ほんとわたしってお馬鹿さん。だって今夜はクリスマス・イヴなんだもん。ワインの栓が開かなきゃパーティは始まらないわ、ぐふふふふっ。

再び通路口に行こうとする隣の女。

由紀子　待ってください、あの。

隣の女　あっ、そうだ。（再び戻ってきて）見たわよ。

由紀子　は？

隣の女　先週の「愛は哀しみの果てに」

由紀子　あ、ああ。

隣の女　森田さん、とってもよかった。

由紀子　ちょい役ですから。

隣の女　ううん、素晴らしかった。

由紀子　どうも。

隣の女　暴力亭主に殴られるわ蹴られるわ、目の回りにこんな大きな青アザまで作っちゃって。

由紀子　ええ。

隣の女　最後は自分で手首切って死んでしまう薄幸な女。ものすごいリアリティだったわ。

由紀子　ありがとうございます。

隣の女　どうしたらあんなに惨めったらしくなれるの？

由紀子　……。

隣の女　あらあら、森田さんの性格のこと言ってるんじゃないのよ。あくまで演技としての評価なんですからね。

由紀子　ええ、わかってますよ。

隣の女　だけど、ほんとに素晴らしかった。あーあ、見る目ないわね、テレビ局の人たち。わたしがプロデューサーだったら森田さんのこと放っておかないんだけどな。東海道四谷怪談のお岩さんとか、番町皿屋敷のお菊さんとか、牡丹灯籠のお露さんとか、そういうのぴったりだと思うんだけどな。

由紀子　山口さん、あの……。

隣の女　あっ、そうだ忘れてた。栓抜き、栓抜き。（奥へ向かう。途中で振り返ってうれし

そうに）今夜、パーティなの、ぐふふふふっ。

通路口に消える隣の女。

由紀子　もう、次から次ぎへと。（グッドに）ほら、いつまでそんなとこに突っ立ってんの、すぐ出てって！

グッド　森田さん、ちょっと聞いてください。

由紀子　（グッドを無視して通路口へ向かい）あの、すいません山口さん。

隣の女　（出てきて）ほら、あった、ワインの栓抜き。これでパーティは完璧よ。

由紀子　よかったですね。

隣の女　よけいなことかも知れないけど。

由紀子　はい。

隣の女　引き出しの中はちゃんと片づけといたほうがいいわよ。

由紀子　あ、はあ。

隣の女　だって、いざというとき迅速にワインの栓抜きが取り出せないんじゃ困るでしょ。

由紀子　そうですね。

隣の女　あら、ごめんなさい、よけいなことだったわ。パーティしない人には関係のない話だったわね。

由紀子　どうせ、わたしのパーティに来てくれるのは新聞勧誘員かセールスマンですから。
隣の女　あら、あら、あら、そういうつもりで言ったんじゃないのよ。でも、そういうパーティだって意義はあると思うわ。クリスマス・イヴに働いている人なんて、みんな悲しい身の上の人たちばかりよ、きっと。今夜この部屋のドアチャイムを鳴らした人全員を笑顔で迎えてあげる、素晴らしい慈善行為だわ。そうだ、あとでわたしケーキの差し入れさせていただくわ、ぐふふふふっ。
由紀子　ありがとうございます、でも……。
隣の女　じゃあ、もう誰か来てるの？　新聞勧誘員？　それともセールスマン？
由紀子　（グッドを指して）セールスマンがそこに。だけど、わたし慈善事業に参加する余裕なんてありませんから。
隣の女　どこにいるの？
由紀子　え？
隣の女　この部屋の中にいるのはあなたとわたしだけよ。
隣の女の言葉にからだが強張る由紀子。
隣の女　（楽しそうに）もう、しょうがないな、やっぱりケーキだけじゃパーティは盛り上がらないわ。よし、こうなったらわたしからお料理もクリスマス・ツリーも差し入

れさせて。

由紀子　や、山口さん。

隣の女　ねえ、ぜひそうさせて欲しいの。

由紀子　いま、なんて言いました？

隣の女　ねえ、ぜひそうさせて欲しいの。

由紀子　その前です。

隣の女　（ちょっと考えて）よし、こうなったらわたしからお料理もクリスマス・ツリーも差し入れさせて。

由紀子　そのもうひとつ前。

隣の女　この部屋の中にいるのはあなたとわたしだけよ。

由紀子　ほんとに？

隣の女　ええ。

由紀子　だって、黒いスーツに黒いネクタイ締めて、黒い鞄を抱えてる……。

隣の女　だれが？

由紀子　セールスマンが。

隣の女　セールスマンが？

由紀子　（グッドを指して）そこに。

隣の女　（グッドがいる方を見て）どこに？

由紀子　ハハハハ。

隣の女　ハハハハ。（気味が悪い）ごめんなさい、わたし少し立ち入っちゃったみたいね。

由紀子　（グッドから目が離せない）……。

隣の女　人間ひとりぼっちが続くと、あまりの寂しさで幻覚が見えたりするものなのよ。

わたしはすっかり立ち直ったんだけど。

わなわなとその場にへたりこんでしまう由紀子。

由紀子　（力無く）ハハハハ。

隣の女　（恐くなって）ご、ごめんなさい、わたしこれで失礼するわ。

由紀子　山口さん！

とっさに隣の女のドレスの裾をつかむ由紀子。つかまれて悲鳴をあげる隣の女。パニックになる二人。

隣の女　や、やめて！　ちょっと放しなさい！

由紀子　山口さん！

隣の女　放して！　放して！

由紀子　ちょ、ちょっと待って！

隣の女　放してちょうだい！

力ずくで由紀子の手を振りほどいてドアを開ける隣の女。

隣の女　お大事にね！

言い捨ててドアを閉めて出ていく隣の女。

由紀子　山口さん！

ゆっくりとグッドの方に振り返る由紀子。

由紀子　（恐る恐る）本当だったの？

グッド　ええ、本当だったんです。

由紀子　本物の死神？

グッド　デニス・グッドと呼んでください。

由紀子　そんな、わたしまだ二十七よ。

グッド　寿命なんです。

由紀子　だってこんなに元気よ。

グッド　寿命なんです。

由紀子　ちょっと待って！　あのね、わたしまだ「徹子の部屋」に出てないの。黒柳さん

にお会いする前に死んじゃうなんて、女優としてこんな不幸なことってある？

グッド　ですから……、

由紀子　毎晩、お風呂の中であんなことも話そう、こんなことも話そうってインタビューの練習して来たの。わたし努力するから、ちゃんと呼んでもらえるように一生懸命頑張るから。せめてテレビ出演が終わるまで待ってもらうってわけにはいかない？

グッド　ですから……、

由紀子　それが叶うんだったら、たとえ収録が終わったその瞬間にバッタリ倒れたってかまわないわ。ちょうどいいじゃない、初出演と追悼番組が一緒に録れて。

グッド　ですから、そういうわけにはいかないんですよ。

由紀子　どうして？　どうしてそれくらいの融通がきかないの？

グッド　寿命だからです。たとえ二十七だろうと健康だろうと「徹子の部屋」に出ていなかろうと、寿命は寿命なんです。

由紀子　そんな……。

グッド　あきらめましょ。あの世もそんなに悪いとこじゃないですよ。

由紀子　わたしこの世のほうがいい。

グッド　それはあなたがあの世をご存じないからですよ。

由紀子　（爆発して）わたしはあの世のことなんか知りたくないの！

グッド　森田さん。

由紀子　だから帰って！　出て行って！　わたしの前からいなくなって！

グッドを睨みつける由紀子。

グッド　ハハハハ、でも、わかるなその気持ち。

由紀子　……。

グッド　わたしにも覚えがあります。あれは、わたしが数えて四十二の厄年のことでした。年の瀬も押し迫った寒い夜、突然、下腹のあたりにキリキリッと差し込むような痛み。もう、痛いの痛くないのって。まさに七転八倒の苦しみです。で、瀕死の状態で小石川療養所にかつぎ込まれたところ、医者の見立てはなんと今で言う急性の腸捻転でした。それで死ぬ間際もね、あんまり苦しいもんだから弱ったときの神頼みで、真言宗と日蓮宗と浄土真宗の信者になっちゃって、あとで葬式あげるときに坊主たちが揉めに揉めましてね、なんともみっともないお話で。

由紀子　ねえっ！

グッド　はい？

由紀子　いったいなんの話？

グッド　あ、すいません、つまりまあ、そういうことなんです。

由紀子　どういうことよ？

グッド　死を前にして人は誰だって平静ではいられません。うろたえ、恐れ、絶望感に苛まれる。お気持ちは良くわかります。わたしだって今のあなたと同じように死ぬ間際にはジタバタしたもんです。しかし今はどうでしょう？　この満ち足りて晴れ晴れとした気持ち、穏やかな毎日、勇気を持って一歩を踏み出したことによって得られた充足感。だいじょうぶ、あなただってきっとこのみっともない態度を笑って話せるときが来ますよ。さあ、行きましょう。新しい一歩を踏み出しましょう！

由紀子の腕を掴んで、そのまま客席に向かいあの世に連れて行こうとするグッド。驚いてグッドの手を振り払う由紀子。

由紀子　やめて！　さわらないで！

グッド（独り言で）惜しかったな、もうちょっとだったんだけどな。

由紀子　みっともなくていいわ！

グッド　森田さん。

由紀子　みっともなくていいから連れて行かないで！

必死になってソファにしがみつく由紀子。

グッド　まいったな……、そうだ！　じゃあこんなふうに考えてみましょうよ。あなた、さきほどこの世のほうがいいとおっしゃいましたよね？

由紀子　言ったけど。

グッド　なるほど、しかし本当にそうでしょうか？　この世なんてそんなにいいもんなんですかねえ。いいと思い込んでいらっしゃるだけじゃないんですか？

由紀子　（警戒して）何が言いたいの？

グッド　さあ、あなたの二十七年間を振り返ってみましょう。どうですか、いい思いでよりも、辛かったり苦しかったりの思い出の方が断然多くはないですか？

由紀子　いい思い出の方が断然多いわ。

グッド　たとえば？

由紀子　（一オクターブ高い声で）た、たとえば？

グッド　ほら、すぐ思い出せないんですよね、いい思い出っていうのは。

由紀子　お、お、お、思い出した！

グッド　じゃあ、聞かせてください。

由紀子　わたし、あの、その、えっと、だから、あの……。

グッド　ほんとに思い出したんですか？

由紀子　思い出したわよ！

グッド　どんな思い出？

由紀子　あの、その、あの、そうだ！　高校卒業して東京へ出て来たばかりのころなんだけど、アルバイトのお給料日の一週間前にお金が足りなくなっちゃったことがあったの。次の日、劇団に行くには行ったんだけどお昼食べるお金もないし、心細くて心細くてどうしようって思ってたら、同期の中村真理子って子が声をかけてくれて、「じゃあ、わたしもお金ないからたくさんは無理だけど」って言って五千円貸してくれたの。わたしもう、うれしくてうれしくて、その子に抱きついてわんわん泣いちゃった。わたしあのときのこと一生忘れないわ。ほら、いい思い出でしょ？　生きてるからこういう幸せな気持ちになれるんじゃないの！

グッド　それから？

由紀子　（一オクターブ高い声で）そ、それから？

グッド　いい思い出いっぱいあるんでしょ？

由紀子　あ、あるわよ。

グッド　どんどん聞かせてもらいたいですね。

由紀子　んと。

グッド　え、なに？　あなた二十七年も生きてきて、うれしいって思うことたったひとつだけ？

ドアチャイムが鳴る。

由紀子　（ドアに向かって）は、はいっ、もうこんなときに。（グッドに）出ていい？

グッド　どうぞ。

玄関へ走る由紀子。

由紀子　（ドアを開けて）悪いんですけど、いま取り込み中なんです。

新聞勧誘員　す、すいません！　今夜中にひとつだけでも契約取って帰らないと、自分、クビになっちゃうんです！

思い詰めた表情で部屋の中に飛び込んでくる新聞勧誘員。

由紀子　あら、あなたさっきの？

新聞勧誘員　あのあと、ほかの家にも行ってみたんですが、どこもみんな冷たくて。無言でドアを閉める人。二度と来るなと怒鳴る人。ちょっと待ってと言いながら、バケツに水を溜める人。唯一、お嬢さんだけが「今度にしてください」って言ってくれたんです。それで、また来てみたんですけど……。

由紀子　（目を輝かせて）ちょうどいいところに来てくれたわ。わたしね、いまとっても

世の中のことが知りたい気分なの！

新聞勧誘員　（びっくりして）ほ、ほんとですか！　ありがとうございます！　じゃあ、じゃあ、この契約書にお名前と、あとここに印鑑お願いします。

由紀子　サインでもいい？

新聞勧誘員　は、はい、いいです。本当にありがとうございました！　……自分、自分もう無理かと思ってたんです。

感極まって声を上げて泣く新聞勧誘員。忍び寄る吹雪の音。どこからか「ジングルベル」がもの悲しく聞こえてくる。

新聞勧誘員　クリスマス・イヴなのに、クリスマス・イヴなのに、自分だけがこんな辛い思いして。もしかしたら、マッチ売りの少女みたいに新聞燃やしながら、明日の朝には凍えて冷たくなってる自分が、その辺の路地裏で見つかるんだなんて、そんなことを想像しながら……。

由紀子　駄目よ！　元気出して！

吹雪と「ジングルベル」が消える。

新聞勧誘員　（ハッと我に返って）は、はい！

由紀子　だいじょうぶ？

新聞勧誘員　はい、だいじょうぶです。本当にありがとうございました。お嬢さんのおかげでこの仕事続けていく勇気が沸いて来ました。生きてて良かったです。

由紀子　頑張ってね！

新聞勧誘員　はい、ありがとうございました！

由紀子　頑張ってね！

新聞勧誘員　ありがとうございます！

由紀子　頑張ってね！

新聞勧誘員　ありがとう！

何度も何度もお辞儀をしながら出ていく新聞勧誘員。我が意を得たりといった表情で振り返る由紀子。

由紀子　ほらっ！　あの人、アパートに帰ってあったかいお布団の中で寝つくまで、ずっと幸せな気分に浸ってられるわ。今日のことは一生忘れられない素敵な思い出になるわ。あの世にこんな気持ちがあるの？　胸がいっぱいになって、熱くなって、はちきれそうになる、こんな気持ちがあの世にはあるの？

グッド　（いつの間にか鞄の中から分厚い書類を出してペラペラとめくりながら）胸がからっぽになって、冷たくなって、重くなるような気持ちだって、この世にはたくさん

あるんじゃないですか？

由紀子　（書類を指して）な、なにそれ？

グッド　この書類に、あなたが生まれてからこれまでの出来事がすべて記されてるんです。これ読めば全部わかっちゃうんですから。ほら、こうやって適当なところ開けて読んでみましょうか？

由紀子　やめて。

グッド　（パラパラと書類をめくって）はい、ここね、ほらあ、辛い出来事が書いてある。

由紀子　やめてよ！

書類を奪おうとする由紀子。するりと体をかわすグッド。

グッド　あなたが幼稚園のときのことだなこれは……、

由紀子　（ムキになって）ちょっと、本当にやめて！　人の人生を勝手に読まないで！

グッド　工作の時間に画用紙丸めてお人形さん作ったことがあったでしょ、覚えてますか？　幼稚園児にしては出色の出来です。友達みんなが羨ましがって、先生も褒めてくれて、もうあなた得意満面です。ところがお昼の休憩時間に、紀美子ちゃんの作った幼稚で粗雑で小汚いお人形さんの腕をあなたうっかりもいじゃって、でも一生懸命謝ったらその時は紀美子ちゃん許してくれたんだよね。ところがその日の帰り道、あ

なたの後ろにそっと忍び寄る邪悪な影！　影！　影！　気配を感じて振り返るあなた。と、そこにはあなたを取り囲む五、六人の幼稚園児たちの姿が！「ねえ、紀美子の人形壊したのはあんたでしょ！」「だったらあんたの人形も壊さなきゃ不公平じゃない？」「そうよそうよ、その人形こっちに渡しなさいよ！」と、凄みながら詰め寄ってくるデブの芳恵に狐目の妙子に出っ歯の美佐枝、そして有象無象の不良幼稚園児たち。ザン！　ザン！　ザン！　あなたは恐くて恐くて泣き出しそうになるのをグッと我慢して、「壊すんだったら自分で壊す！」そう言って、みんなの前でビリビリ破って壊してしまった。これは辛いよなあ、悔しいよなあっ。傷ついた心を小さな胸の奥に仕舞って、夕闇迫る田んぼ道、悔し涙で顔をグシャグシャにしながら帰ったこと覚えてるでしょ？　ほらあ、辛い少女時代が蘇ってくるじゃない。ああ、読むに耐えないな。

由紀子　（しらけて）……。

グッド　ほら、あなたの人生をパラパラッと適当にめくって見た結果がこれです。この書類にはもっと可哀想な出来事が満載させてるんですから。ね、あきらめましょ、今までがこんな調子なんですから、これから先だってそうそう良いことなんかないですよ。辛く苦しい出来事が洪水のように押し寄せてくるだけです。

由紀子　（むきになって）そういう嫌なことも全部ひっくるめて、わたしは好きなの、楽

しいの、それが生きてるってことじゃない。

グッド　ちょっと意地になってませんか？

由紀子　意地になんかなってないわ。

電話が鳴る。

由紀子　もう、なんで今日に限って電話だの新聞勧誘員だの……、（ハッとして）そうか、これは信号なんだわ！　この世がわたしを引き留めてるのよ。だから、みんながわたしとかかわり合いを持ちたがるんだわ。新聞勧誘員も、お隣の山口さんも、留守番電話にメッセージを残してくれた人たちも、すべては信号だったのよ。この世がわたしを必要としてるんだわ！

鳴り続けている電話。

グッド　取り合えずお電話に出たほうがいいんじゃないですか。

由紀子　そ、そうね。

受話器を取る由紀子。

由紀子　はい、森田ですけど。（ドキリとして）坂本さん！　……ずいぶんおひさしぶりですね。ええ、元気でやってました。いまさら、どうしてわたしなんかに？　えっ、死んだ、真理子が？　ええ、ええ、そうだったんですか。ええっ、それで真理子の代

役をわたしに？　……あの役を。

呆然とする由紀子。受話器を手で押さえてグッドの方に振り返って、

由紀子　（複雑な気持ちで）わたし、必要とされてるみたい……。

顔を見合わせる由紀子とグッド。暗転。

2

劇団小稽古場。スタジオ公演の出番待ちをしている劇団研究生三人。簡易楽屋として使用されている稽古場。鏡に向かって化粧したり衣装に着替えたり、それぞれ準備の真っ最中。

裕　子　ねえ。

弘　美　うん？

裕　子　どうなっちゃうんだろうね。

千　佳　どうにもならないよ。

裕　子　そうかな。

弘　美　このままいったら久美子が主演じゃない？

裕　子　だって、あいつ研究生だよ。

弘　美　だけど台詞覚えてるの代役のあいつしかいないじゃない。

裕　子　でも、久美子が主演じゃお客が入んないわよ。

弘　美　そうね、真理子さんだから再演の価値があったのにね。

裕　子　わたし、いまから台詞覚えようかな。

千　佳　あの膨大な台詞？

弘　美　台本二百ページ中、約八十ページがヒロインの台詞だから、これを本番までの二週間で割ると、一日だいたい六ページか。

千　佳　気が遠くなるわ。

いっせいに大きなためいきをつく三人。

千　佳　台本八十ページを食べろっていうんなら食べられるんだけどな。

裕　子　あんたそれ坂本さんの前でやってみれば？

千　佳　面白い女優だと思ってもらえるかな。

裕　子　面白い生き物だと思ってもらえるんじゃない。
弘　美　劇団で飼ってくれるかもね。
千　佳　二人とも冷たい言い方するのね。
裕　子　あんたが間抜けなこと言うからでしょ。
弘　美　そうね。
千　佳　あーあ、面白い噂聞いたんだけど、喋りたくなくなっちゃったな。
裕　子　ちょっとなによそれ？
弘　美　面白い噂って？
千　佳　あれ、聞きたいの？
裕　子　そりゃ聞きたいわよ。
弘　美　ねえ、どんなこと？
千　佳　実はね、真理子さんの代わりの人、もう決まっちゃってるんだって。
弘　美　えーっ。
裕　子　なにそれ。
千　佳　真理子さんと同期で森田由紀子って人。
裕　子　だれ、それ？

弘　美　何者なの？

千　佳　初演のとき、ほんとは二人のダブルキャストだったんだって。

弘　美　へーっ。

千　佳　ところが、その人初日の一週間前に失踪しちゃったんだって。

裕　子　なにそれ。

弘　美　で、今度は初日の二週間前に舞い戻ってきて、主役に返り咲くってわけ？

裕　子　真理子さんも気のどくう。

弘　美　劇団の上層部は中止にしたいんでしょ？

千　佳　坂本さん押し切るつもりみたいよ。

裕　子　なんだか、舞台よりこっちの方が面白そう。

三人の意地悪な笑い声。このとき通路口に現れる舞台監督。

舞台監督　（顔を強張らせて）おい、何やってんだ、出番だぞ！

三　人　（びっくりして）あ、すいません！

あわてて立ち上がる三人。

舞台監督　早くしろ、舞台止まったまんまだぞ！

三　人　（首をすくめて）ハーイッ！

ものすごいスピードで通路口へ走り去る三人。

舞台監督　たくう、しょうがねえなあ。

ぶつぶつ文句を言いながら通路口に消える舞台監督。短い間。通路口から顔をのぞかせる由紀子。そして、そのすぐ後ろにグッドの姿。

由紀子　よかった、誰もいないみたい。

ホッとして溜息をつく由紀子。後ろのほうで重たい溜息をつくグッド。無視して懐かしそうに化粧前まで行く由紀子。

由紀子　……相変わらずここが楽屋代わりなんだ。

小さな声で「あ～あ」とつまらなさそうにつぶやくグッド。

由紀子　（部屋の中を見回して）なんにも変わってないな。

「は～あ」とさらに重い溜息をつくグッド。

由紀子　（うんざりして）ちょっと！

グッド　なんですか？

由紀子　そんなにつまんないんだったら帰れば？

グッド　そうはいきませんよ、わたしは死神なんですから。あなたのそばを片時も離れるわけにはいかないんです。

由紀子　そうだ、ね、アパートに帰ってお掃除でもしててよ。
グッド　あなた、なんか勘違いしてません？　わたしお手伝いさんじゃないんですよ。
由紀子　わかってるわ、デニス・グッドさんでしょ。
グッド　いいえ、あなたには事の重大さが全然わかっていません。ほら、ちょっとそこにお座りなさい。
　　その場に正座するグッド。由紀子も不承々々それに従う。
グッド　いいですか、あなたの死期を遅らせて舞台に立たせてあげるという、これだって大変なことなんですよ。もし、このことがあの世にばれたりしたら……。
由紀子　はいはいはい、死神さんのご好意にはほんとに感謝しておりますですよ。
グッド　なんですかその言い方、わたしをおちょくってんですか？
由紀子　おちょくってなんかないわよ。
グッド　いいえ、絶対に馬鹿にしてます。だいたい、あなたはね……、
　　奥でバケツを蹴る音。
由紀子　ほら、誰か来た。いい？　お願いだからおとなしくしててね！
グッド　わかってますよ、子供じゃないんだから。
雄二の声　（オフで）あいつら！

下手奥通路口から薄汚れたジャンパーにジーンズ姿の坂本が現れる。
顔色を変える由紀子。由紀子に気づく雄二。バツが悪そうに。

雄　二　……おう。

由紀子　……ひ、ひさしぶり。

雄　二　ああ、……電話、しないほうがよかったか。

由紀子　う、ううん、そんなことない。

グッド　なに、このギクシャクした雰囲気？

雄二は無言で由紀子のためにパイプ椅子を用意してやる。

由紀子　ありがと。

腰かける二人。

雄　二　悪いなこんなところで、スタジオ公演の最中なんだ。

由紀子　相変わらず、小稽古場が楽屋代わりなのね。

雄　二　ああ。

由紀子　……真理子、かわいそうだったね。

雄　二　ああ。

由紀子　死因はなんだったの？

雄　二　急性の腸捻転。

グッド　あっ、こりゃ奇遇ですね。

あわててグッドに合図を送る由紀子。

雄　二　どうした？

由紀子　ううん、なんでもない。真理子、最後どんなだった？

雄　二　見てられなかったよ。

由紀子　そう。

雄　二　よっぽど苦しかったんだろうな。あいつ、死ぬ間際にキリスト教と浄土真宗とブードゥー教にまとめて入信してね、あとで葬式あげるとき、ちょっともめたんだ。

グッド　わかるなあ、その気持ち。

由紀子　（思わず声に出して）ちょっと！

雄　二　どうした？

由紀子　ううん、なんでもない。そう大変だったのね。

気持ちを切り換えて立ち上がる雄二。

雄　二　上の連中は、公演中止にしたいって言ってるんだ。

由紀子　そうでしょうね。

雄　二　でも、もうだいじょうぶだ。君が引き受けてくれたんだから。

一瞬、目を合わせるが、すぐに視線を落とす二人。

グッド　なにこのしっとりした雰囲気。

雄　二　じゃあ、事務所に行って台本もらってくるよ。

由紀子　台本だったら持ってるわ。

雄　二　そうか、……捨てないで持っててくれたのか。

由紀子　だって初めての主演作だったんだから。

雄　二　台詞忘れてなかったか？

由紀子　夕べ読み返してみたらすぐに思い出した。

雄　二　そうか、じゃあ、共演者たち呼んでくるよ、ここで待ってて。

由紀子　ええ。

通路口まで行って立ち止まり、由紀子の方へ振り返る雄二。

雄　二　……今度こそ、俺の書いた台詞、舞台で喋れよな。

雄二退場。見送る由紀子。

グッド　（独白で）まああっ、カッコいいんじゃない？「今度こそ、俺の書いた台詞舞台で喋れよな」わたしも、一度でいいからああいう台詞喋ってみたかったなあ。

由紀子　なにぶつぶつ言っての？
グッド　いえ別に、それよりいいんですか、あんないいかげんなこと言って。台詞なんか
　ほとんど忘れてたじゃないですか。
由紀子　だいじょうぶ、だいじょうぶ。
グッド　ほう、じゃあ、最初の長台詞覚えてますか？　はい、どうぞ。
由紀子　えー。
グッド　「えー」じゃないでしょ。
由紀子　あたま、なんでしたっけ？
グッド　（黒い鞄から台本を取り出し）もう、しょうがないな、「昔は楽しかった」ですよ。
由紀子　ああ、そうか。
グッド　ほら、やってみて。
由紀子　昔は楽しかったって、みんなよく言うけど……。（上目遣いにグッドを見る）
グッド　（溜息）「ほんとはけっこう辛い思いしてるのね誰だって」
由紀子　ほんとはけっこう辛い思いしてるのね誰だって。あっ、思い出した。その次は「で
　も、時間が辛い気持ちを忘れさせてくれるから」でしょ？
グッド　続けてください。

由紀子　時間が辛い気持ちを忘れさせてくれるから、人間ってけっこう生き続けていけるんだと思うの。

グッド　そのあとは？

由紀子　けどね、いつまでたっても忘れられないことって、辛い気持ちが心の中にこびりついてることが、誰だって、ひとつや二つあるんじゃないかな。

グッド　うん、その調子、その調子。

由紀子　後悔したくない。

　　このとき、奥の壁に設えてある姿見の中に白いドレスを来た女の姿が浮かびあがる。

由紀子　今度こそ絶対に後悔したくないの。

真理子　（唱和するように）今度こそ絶対に後悔したくないの、フフフフフ……。

グッド　（不穏な空気を察知して）ちょっと待って！

由紀子　えっ、間違えちゃった？

　　女の姿が消える。

グッド　い、いえ、なんでもありません。

　　奥の通路口から大勢の人の声。

由紀子　あっ、みんな来たみたい。……頑張らなきゃ。

背筋を伸ばす由紀子。だが、グッドの心の中にもやもやは残る。暗転。

3

魔法使いの住処。劇団稽古場の暗い壁にうっそうと繁る木々が照明によって表現される。舞台前中央に客席側へ向かって立つグッド。姿見の鏡の中に現れる時を司る魔女。

老　婆　（しわがれた声で）話はわかった。それで、いったいわしになにをして欲しいというのじゃ。

グッド　ええ、つまり……。

老　婆　つまり、なんじゃ？

グッド　万が一、規則違反がばれたとき罰せられないですむ方法を。

老　婆　たやすいことじゃよ、ヒッヒッヒッヒッ。

グッド　そ、そうですか。

老　婆　わしを誰じゃと思うておる。

グッド　時を司る魔女だと聞きました。

老　婆　そのとおり、お前の頼みなど簡単なことじゃ。

グッド　どうすればいいんですか？

老　婆　危機が訪れたとき、心の中でわしを呼ぶがいい。そうすればお前がその娘の部屋を訪れる直前のところまで時を戻してやろうわい。そして、再び同じことを繰り返し、今度はその娘の願いにけっして耳を傾けぬことじゃ。

グッド　しかし、それでは……。

老　婆　（からかうように）それでは娘がかわいそうか？

グッド　……。

老　婆　ヒッヒッヒッヒッ、面白い、こいつは傑作じゃわい。

グッド　わたしの願いを叶えていただいた見返りには、何を差し上げればよろしいのでしょうか。

老　婆　そうさなあ、お前のその声をもらおうかい。

グッド　声？

老　婆　その口の中のベロと一緒にな。

グッド　そんな……。

老　婆　嫌ならこの話はなかったことにするんじゃな。

グッド　い、いえ、……では、万が一その時には。

老　婆　楽しみに待っておるぞい、ヒッヒッヒッヒッ。

消える老婆。複雑な表情のグッド。老婆の笑い声の中、暗転。

4

由紀子のアパート。宵。テーブルの上にはウィスキーの瓶とグラス。部屋の中には誰もいない。ドアチャイムの音。短い間。キッチンか

ら由紀子登場。彼女は台本を手に持ったまま、ブツブツと台詞をつぶやきながらソファに腰かける。再びドアチャイムの音。

由紀子　（溜息をついて）はい、どちらさまですか？

イライラしながらドアを開ける由紀子。そこに立っていたのは野川幸子。地味だが趣味のよいコートを着ている。

幸　子　今晩は。

由紀子　（狼狽えて）あ、あら、幸子、どうしたの？

幸　子　上がっていい？

由紀子　ええ、どうぞ、どうぞ。

上がってきてソファに腰かける幸子。

由紀子　ああ、ごめんね夕べは。行きたかったんだけど、急な仕事が入っちゃって。

幸　子　いいのいいの。

由紀子　楽しかった？　みんな集まったんでしょ？

幸　子　……。

由紀子　どうしたの？

幸　子　そのことで報告に来たの。

由紀子　報告？

幸　子　『グループ・アクトレス』のことだけど。

由紀子　ええ。

幸　子　解散するわ。

由紀子　解散？

幸　子　だれもこなかったの『女優たちだけのクリスマス・パーティ』に。

由紀子　だれも？

幸　子　わたし以外はひとりも。

由紀子　（驚いて）そんな……。

幸　子　想像してみて。レストランの奥の個室。壁にはささやかな飾りつけ。テーブルの真ん中には三段重ねのデコレーションケーキ。それぞれの席の前には小さなキャンドルと名前入りのカード。だけどそこにいるのはわたしひとりだけ。窓辺の席では恋人たちが楽しそうにお喋りしている。だけどそこにいるのはわたしひとりだけ。

由紀子　ご、ごめんなさい。

幸　子　やがて次々に運ばれてくるワインにシャンパン。そして、豪華なお料理の数々。だけどそこにいるのはわたしひとりだけ。

由紀子　悪かったわ。まさかそんなことになってたなんて。

幸　子　いいのいいの、気にしないで。（テーブルのウィスキーを指して）飲んでいい？

由紀子　ああ、じゃあ、新しいグラスを……。

幸　子　これでいいわ。

グラスにウィスキーを注いで一気に飲み干してしまう。

幸　子　（大きなためいきをついて）そういうわけでみんなの家を訪ねて解散宣言して回ってるの。じゃあ、わたしはこれで。

由紀子　さ、幸子、ちょっと待って。

玄関まで行っておもむろに振り返る幸子。

幸　子　あなたがアニー・サリバンを演じるはずだった『奇跡の人』わたしの手で演出出来なくて残念だわ！

ドアチャイムが鳴る。

由紀子　ごめんね、ちょっと待ってて。

幸　子　わたしは帰るわ。

由紀子　まだ、話は終わってないでしょ。

不承々々ソファに腰かけ直す幸子。玄関のドアを開ける由紀子。

由紀子　はい、どちらさまでしょうか。……吉村さん！

そこに立っていたのは吉村正志。パリッとしたスーツに身を包み、真紅の薔薇を胸ポケットに一輪挿している。

正　志　メリー・クリスマス。今夜はいたね、フフフッ。

胸ポケットの薔薇を由紀子に差し出す。躊躇するが受け取る由紀子。そのときソファに腰かけている幸子に気づく正志。一瞬、激しく動揺するが、すぐに笑顔を取り繕う。会釈を交わす二人。

由紀子　（困惑して）あの、なにかご用ですか？

正　志　プレゼント、持ってきたんだ。

由紀子　プレゼント？

正　志　ああ、クリスマス・プレゼント。夕べの留守番電話聞いてくれた？

由紀子　え？　ああ、ええ。

正　志　（ポケットからリボンのかかった小箱を取り出して）僕の気持ち。

由紀子　困ります、こういうことしていただいては。

正　志　ドント・ウォーリー、これはあくまで個人的なプレゼントなんだ。会社とは関係ないから、そういうことは気にしないで。ただ純粋に、正直な気持ちで返事してくれ

ればいいから。

無理やり押しつける正志。

由紀子　なんですか、これ？

正　志　指輪。

由紀子　（驚いて）指輪！

ドアの外からけたたましい車のクラクションの音。

正　志　オー・マイ・ゴオ～ッド！　ああ、ごめん。すぐそこの路地に駐車して……、ちょっと待ってて。

にっこり笑って出て行く正志。

幸　子　だれなの？

由紀子　今年の夏にテレビで流れてたでしょ、わたしの出たコマーシャル。

幸　子　ああ、インスタント・マーボナスの？

由紀子　そこの食品会社の……、

幸　子　御曹司？

由紀子　係長代理。

幸　子　なんだ。

由紀子　それ以来、いろいろ仕事まわしてくれるの。企業ビデオとか、ポスターとか、社内報の表紙とか。

幸　子　ずいぶん気に入られちゃったのね。

由紀子　（小箱をながめて）だけど、困るなこんなもの。

幸　子　個人的なおつきあいは？

由紀子　そんなものないわよ。

幸　子　じゃあ、いきなり指輪のプレゼント？　非常識な男ね。

正志が戻ってくる。

正　志　非常識なやつだよね、こんな狭い路地にあんな大きな車で入ってくるなんて。上がってもいいかな？

由紀子　（戸惑いながら）え、ええ。

正　志　大事な話があるんだ。

由紀子　そうですか。（観念して）幸子、悪いんだけど……。

幸　子　もうちょっといることにするわ、なんだか面白そうだから。

由紀子　（観念して）どうぞ上がってください。

正　志　お邪魔します。

部屋に上がってくる正志。幸子に頭を下げる。応じる幸子。

由紀子　どうぞこちらに。

正　志　ああ、ありがとう。

ソファに腰かける正志。

由紀子　じゃあ、あの、お茶でも。

正　志　いや、おかまいなく。由紀子もここに腰かけて。

由紀子　……はい。

正　志　あの、こちらは？

幸　子　親友です。

由紀子　え、ええ。

正　志　そうですか、いやあ、それならちょうどよかった。あの……、

幸　子　野川幸子です。

正　志　野川さんに立会人になっていただければ、僕もありがたいです。

幸　子　わたしで良ければ喜んで。

正　志　ありがとうございます。……由紀子。

由紀子　は、はい。

正　志　（テーブルのウィスキーを指して）飲んでいいかな？

由紀子　ええ、じゃあ、新しいグラスを……。

正　志　これでいいよ。

ウィスキーをグラスに注いで、これも一気に飲み干してしまう。

正　志　実は、由紀子には言ってなかったんだけど、僕、会社を辞めたんだ。

由紀子　（ちょっと驚いて）そうなんですか。

正　志　ああ、ようやくわかったんだ。日本という小さな国には僕という大きな器は納まりきらないんだということが。そのことにもっと早く気づくべきだったよ。

由紀子　はあ。

正　志　（内ポケットからチケットを取り出して）由紀子、ここにニューヨーク行きの航空券が二枚ある。

由紀子　はい。

正　志　僕についてきてくれるね？

由紀子　（驚いて）ええっ？

正　志　驚くのも無理ないよ。僕だってヘッド・ハンティングの話を聞かされたときには軽いパニックさ。にわかには信じられなかったね。だけど話を聞いていくうちに確信

したんだ。「そうだ、いまこそこの波に乗るんだ」ってね。

幸　子　（クールに）ヘッド・ハンティングねえ。

正　志　（幸子を無視して）だいじょうぶ由紀子、これは堅実な話なんだ。名前を出せば誰だって知ってるアメリカのＩＴ企業のナンバー・ツーだった人物が、今度独立して会社を立ち上げることになったんだが、彼は僕をじきじきにパートナーとして選んでくれたんだ。オウ、グレイト！　僕はついてる！　近い将来この手でつかむ栄光のことを考えたら三百万円の共同出資費なんて微々たるもんだ。

由紀子・幸子　（同時に）三百万円……。

正　志　僕は、撮影スタジオで初めて会ったあのときから、由紀子に、フォーリング・ラヴだった。だけど、内気な僕に告白なんか無理だとあきらめてた。でも、今度のことで僕は生まれ変わったんだ。夢と希望にあふれた自信満々のナイス・ガイに。

由紀子　吉村さん、わたし……。

正　志　さあ、由紀子。何にも言わずにどうかその指輪を受け取ってくれ。そして、僕と一緒にニューヨーク行きの飛行機に乗ろう。二人でアメリカン・ドリームを手に入れようじゃないか。僕はマンハッタンの最上階に駆け上がり、由紀子はブロードウェイの舞台の上に駆け上がるんだ！

幸　子　（あきれて）夢みた～い。

正　志　（興奮して）由紀子、来年のクリスマスにはニューヨーク五番街のティファニー本店で二人の結婚指輪を買ってあげるからね！

ドアチャイムの音。

由紀子　あ、ちょっとすみません。

立ち上がって玄関に行く由紀子。ドアを開けると、そこに立っていたのは事務所の女社長、高林聡子。ブランド物のスーツに身を包み、チェーンつきのサングラスを首からぶら下げている。

聡　子　今晩は、ゆきちゃん。

由紀子　社長！

聡　子　（険しい表情で）これはいったいどういうこと？　なぜ、あなたはここにいるの？まあ、いいわ。言い訳は途中で聞くから。さあ、支度しなさい。関口さん、ホテルで待ってくださってるのよ。

由紀子　わたし、そういうことは、もう……。

由紀子を見つめる聡子。

聡　子　……上がっていいかな？

由紀子　え、ええ、どうぞ。

聡　子　（中をのぞきこんで）あら、お客さんがいるの？（正志を見つけて）あら、吉村さんじゃありません？　ねえ、吉村さんでしょ？

正　志　あ、ああ、どうも。

聡　子　なあに、お安くないわねえ、二人ってそういう関係？

由紀子　ちがいます、そんなんじゃありません。

聡　子　なるほど、そういうことか。なんだそういうことか。ゆきちゃん、あなたには失望させられたわ。

由紀子　……。

聡　子　こんなしょうもない男とドラマのレギュラーを秤にかけるなんて、あなた、いったいなにを血迷ってるの？

正　志　しょ、しょうもない……。（理解出来ない）

由紀子　吉村さんとはなんでもありません。

聡　子　（吉村に）ほんとにそうなんですか？

正　志　ええ、昨日まではなにも。でも、今夜からは二人の第一章が……。

聡　子　なんにもないの？　じゃあ、なんの問題もないじゃない。（由紀子の腕をつかん

で）じゃあ、急いで行きましょ。きちんとあやまれば関口さんわかってくださるわ。

由紀子　（腕を振り払って）いやです！

聡　子　どうしてそう聞き分けがないの。

由紀子　わたし、もう、そういうことしたくありません。

聡　子　（大声で）一回寝るのも二回寝るのもおんなじことじゃない！

聡子の言葉に硬直する部屋の中。

由紀子　……。

正　志　（混乱して）えっ？　えっ？　それって、寝るって？

幸　子　最低の話ね。

聡　子　そうよ、最低の話だわ。だけどね、うちみたいな小さな事務所が伸し上がって行くためにはそれくらいのことしなきゃね。女の武器使って、体当たりでぶつかってかなきゃ、一流にはなれないんだから。（ウィスキーを指して）ちょっと、ちょうだい。

由紀子　……。

ソファに腰かけるといきなりウィスキーをラッパ飲みする聡子。そして自嘲的にひとしきり笑う聡子。その様子を不愉快そうに見ている正志と幸子。

聡　子　お酒が友達、お酒だけがわたしの友達だったわ。去年のクリスマスも、おととしのクリスマスも、事務所始めてから十五年、毎年々々大晦日まで、仕事、仕事、仕事。クリスマスの夜だからって、なにか楽しいことがあるわけじゃなし、ただ疲れた足を引きずり引きずりマンションに帰って、ひとりグラスをあおるだけ。そんな思いまでして頑張って来たのは、「いつかビッグになってやる」そんな女の意地だけで十五年、十五年間を突っ走って来たのよ。プロデューサーがわたしでいいって言うのなら、毎晩だってベッドでおつきあいしてあげるわ。だけど、あいにく向こうはゆきちゃんをお望みなの。いい？　女優なんて望まれてるうちが花よ。花なら咲かなきゃ意味無いわ。さあ、発想を転換するのよ。もっとポジティブに考えて、積極的に突き進んで行きなさい。恐れることはないわ。あなたには輝かしい未来が待ってるんだから。ねっ、今からでも遅くないわ。わたしと一緒に……、

由紀子　未来なんかありません。

聡　子　ゆきちゃん。

由紀子　わたしには未来はないんです。

聡　子　もう、そんなふうにネガティブに考えちゃだめよ。

由紀子　わたしの目の前にあるのは、暗い、暗い闇の世界だけなんです。

聡　子　ゆきちゃん、ちょっと、あなただいじょうぶ？

由紀子　（感情的に）わたしのことはほっといてください！

抵抗する聡子の腕をつかんで、有無を言わせずそのまま玄関から突き出し、ドアを閉めてしまう由紀子。やがて虚脱感に襲われてその場にへたり込んでしまう。その様子を驚きといたたまれない思いで見ている幸子と正志。暗転。

5

劇団小稽古場。劇団研究生三人が本公演用の舞台衣装を着て、鏡に向かって化粧したり衣装に着替えたり、それぞれ準備をしている。

千　佳　大したもんだなあ。

裕　子　……。

千佳　実力あるよね。

弘美　……。

千佳　坂本さんと対等にやり合う人って初めて見た。

裕子　単純ね、千佳は。

弘美　観察力なし。

千佳　なによその言い方。

裕子　実力があるから対等にやり合ってると思ってるの？

千佳　だってそうでしょ？

弘美　判断力もなし。

千佳　なによ二人とも。

裕子　不倫相手だったんだって。

千佳　誰が？

弘美　森田由紀子が。

千佳　誰の？

裕子　坂本さんの。

千佳　うそおっ。

弘　美　真理子さんという奥さんがいたのにね。

裕　子　見ててわかんない？

千　佳　全然わかんなかった。

弘　美　勘も悪し。

千　佳　もう。

裕　子　気安いでしょ、態度が。

千　佳　そうかな。

裕　子　敬語使ってても目つきでわかるじゃない。

千　佳　うーん。

弘　美　小川先輩に聞いたんだけどね。

千　佳　うん。

弘　美　坂本さんがこの本で賞を取ったでしょ。

千　佳　うん。

弘　美　劇団は真理子さんで行くつもりだったらしいの、主演。

裕　子　看板女優だもん、当然よね。

弘　美　それを強引に押し切っちゃったのよ、坂本さん。

千　佳　すごい。

弘　美　この役は彼女のために書いたんです。

千　佳　ドラマチック。

裕　子　公私混同よ。

弘　美　散々揉めたあげくに上層部が折れて、真理子さんと森田由紀子のダブルキャスト
　　でゴーサインが出たってわけ。

裕　子　妻と愛人のダブルキャスト。

弘　美　ドロドロね。

千　佳　……。

裕　子　それだけ揉めといて本番の一週間前に逃げちゃうんだもんね。

弘　美　どんな理由があったって許されないわよ。

裕　子　よく戻って来れると思わない？

弘　美　しゃあしゃあとねえ。

千　佳　何があったんだろう。

裕　子　え？

千　佳　理由。

弘　美　なんの？

千　佳　逃げちゃった理由。

裕　子　恐くなったんじゃない？

千　佳　よっぽどのことだよね。

弘　美　なにが？

千　佳　だって、全部棄ててくわけでしょ？

裕　子　なにを？

千　佳　恋人も、名声も、生き甲斐も。

裕　子　……。

弘　美　……。

千　佳　何があったんだろう。

裕　子　うん。

弘　美　そうね。

千　佳　何があったんだろう。

沈黙する三人。そのとき開演のブザーが鳴る。

弘　美　あ、舞台始まる。

裕　子　本当だ。

弘　美　千佳、行くわよ。

千　佳　何があったんだろう。

裕　子　ほら、急ぎな！

千　佳　う、うん。

慌てて退場する三人。照明が変わり舞台全体がゆっくりと暗くなって行く。観客たちのざわめき。場内アナウンス。

アナウンス　お待たせいたしました。まもなく開演いたします。上演時間は二時間十五分。途中十分間の休憩がございます。それでは最後までごゆっくりごらんください。

暗転。不可思議な雰囲気の効果音が聞こえてくる。ぼんやりと明るくなってくる舞台。由紀子の部屋や小稽古場や舞台のあちこちに白い仮面の女たちの姿。皆、じっと動かない。部屋の出入口から由紀子が現れる。

由紀子　昔は楽しかったってみんなよく言うけど、ほんとはけっこう辛い思いしてるのね誰だって。でも、時間が辛い気持ちを忘れさせてくれるから、人間ってけっこう生き続けて行けるんだと思うの。

ゆっくりと動き出す白い仮面の女たち。由紀子を囲むように集まってくる。

由紀子　けどね、いつまでたっても忘れられないことって、辛い気持ちが心の中にこびりついてることが、誰だってひとつや二つあるんじゃないかな。後悔したくない。今度こそ絶対に後悔したくないの。だって……、だって……、

絶句する由紀子。必死に台詞を続けようとする。

由紀子　後悔したくない。今度こそ絶対に後悔したくないの。だって……、だって……

…、（混乱する）台詞が出てこない！

突然、けたたましい笑い声をあげる白い仮面の女たち。

由紀子　（正面を向いて）あっ、岸本先輩お久しぶりです。テレビでいつも拝見してます。

白い仮面の女たち　（海の底から聞こえてくるように）あなた、だれ？

由紀子　え、あの、森田です。森田由紀子です。

白い仮面の女たち　あなた、だれ？

由紀子　わたしです。あっ、小川先輩わたしです。一年後輩の森田です。

白い仮面の女たち　あなた、だれ？

由紀子　やだあ、昌美。わたしよ、由紀子よ。

白い仮面の女たち　あなた、だれ？

由紀子　どうして、どうしてみんなわたしのこと知らないの？　そんなはずないわ！

白い仮面の女たち　あなた、だれ？

由紀子　わたしよ！　わたしはわたしよ！

女たちが一斉に腕を突き出し、由紀子に向かって、

白い仮面の女たちの声　（大音響で）あなた、だれ！

暗転。

6

由紀子のアパート。ソファに横たわってうなされている由紀子。テーブルの上には、ほとんど空になったウィスキーの瓶とグラス。

由紀子　（うわごとで）わたしよ、わたしはわたしよ……。

ハッとして目覚める由紀子。びっしょり汗をかいている。頭がズキズキ痛む。通路口からエプロン姿のグッドが顔を出す。

グッド　あっ、気がつきました？

洗面器とタオルを持っていそいそと出てくるグッド。

由紀子　わたし……。

グッド　さあ、横になって。まだ起きちゃだめです。（タオルをギュッとしぼる）ささ、これひたいに当てて。

由紀子　頭がガンガンする。

グッド　ウィスキー、ラッパ飲みしといて、頭がガンガンするくらいですんだんだから御の字じゃないですか。下手したらいまごろあの世行きでしたよ。

由紀子　もう、行きたくない。

グッド　えっ？

由紀子　もう、舞台なんかどうでもいい。

グッド　……まあ、気持ちはわかりますけど、今日のことについてはあなたの方が悪いんじゃないのかなあ。

由紀子　グッドさん、あの人の肩持つの？

グッド　あと一週間で幕が開くんですよ。あなたが主演の舞台が始まるんです。演出家と意見が食い違ったくらいで、稽古ほっぽり出して帰ってくるなんて、これじゃ子供の喧嘩ですよ。

由紀子　どうせ、わたしは子供よ。人間としても女優としても未熟な女よ。

グッド　由紀子さん。

由紀子　だからもういいの、わたしは未熟なままで死んでいくわ。いまさら舞台に立ったって、いったいそれが何になるって言うの？　けっきょく死ぬんじゃない。死んだら終わりよ、舞台なんて意味ないわ。

グッド　いい思い出がひとつ増えるじゃないですか。

由紀子　……。

グッド　あなたの数少ないいい思い出の中でも、とびっきりのいい思い出が。『彗星のように現れた新進女優。見事な演技のただ中でその短い生涯を閉じる』すごいじゃないですか、新聞に一面大見出しで出ますよ。人生のフィナーレを輝かしいものに出来るじゃないですか。

由紀子　そんなの無理。せいぜい三流スポーツ新聞の三面記事に、『若手女優舞台で死亡』それで終わりよ。

グッド　由紀子さん……。
なすすべもなくただ由紀子を見守るクッド。
グッド　（なにかを思いついて）そうだ、いいものあげましょう！
かたわらの鞄の中をごそごそ捜すグッド。何かを取り出して、それを後ろ手に持ち、
グッド　（由紀子の目の前へゆっくりと差し出して）はい、どうぞ。
由紀子　なに？
グッド　印籠です。
由紀子　（受け取って）ああ、時代劇で見たことある。
グッド　ちょっと、その蓋開けてみてください。
蓋を開ける由紀子。けれども中には何も入っていない。
由紀子　……からっぽ。
グッド　ええっ、そんなことないですよ。（自分でのぞいてみて）ほら、よおくのぞいてみてくださいよ。
もう一度印籠の中をのぞく由紀子。
グッド　底の方に、『勇気』がこびりついてるでしょ。

思わずグッドを見る由紀子。にっこり笑い返すグッド。

グッド　不安になったときや、辛いことがあったとき、それをこう両手で持って、『勇気をください』って祈るんです。すると、じわじわっと勇気がわいてきますから。

由紀子　（つい笑って）ほんと？

グッド　ほら、もう効き目が出てきた。……あなたにあげます。

由紀子　（笑顔で）一週間遅れのクリスマス・プレゼントね。……グッドさん、どうしてそんなにやさしくしてくれるの？

グッド　（ドキリとして）えっ？

由紀子　わたし、この一週間、わがままなことばかり言ってるわ。なのに、どうして？

グッド　それは……。

由紀子　……。

グッド　わたしも、役者だったんですよ、まだ人間やってたころ。

由紀子　（驚いて）そうだったんだ。

グッド　ええ、もっともわたしの場合、あなたみたいに主役を張れるような、そんな大層なもんじゃありませんでした。役者の身分を上から言いますとね、名題役者、相中、中通り、稲荷町と続くんですが、わたしは下から二番目の中通り止まりの役者でした

……。『仮名手本忠臣蔵』という芝居をご覧になったことがありますか？

由紀子　うん、見たことある。

グッド　ご存じ赤穂義士の討ち入りを題材にした人気狂言ですが。ある年の暮れ、わたしに振られたのは「五段目」の定九郎一役でした。……この役は雨降る夜の街道に現れる山賊で、旅人を殺して五十両の金を奪うやいなや、間抜けなことに猪に間違えられて鉄砲で撃ち殺されてしまうというだけの、さしてしどころのない敵役です。台詞も金を奪ってほくそえむときに、たった一言「五十両」というだけ。でもね、わたし毎日々々懸命に稽古しましたよ。「五十両」「五十両」「五十両」いろんな言い方を工夫してみました。

由紀子　（興味津々で）それで、そのあとどうなったの？

グッド　これでお終いです。

由紀子　え？

グッド　本舞台を七日後に控えた雪の降る夜。あっけなく病に倒れてあの世行き。定九郎よりもわたしの方が、さしてしどころのない人生でした。

由紀子　そうだったんだ……。

グッド　ところが、わたしが死んで少ししたあとに、この定九郎役で一世を風靡する役者

が現れるんです。中村座の中通り、中村仲蔵という人です。仲蔵さんは、山賊の格好をするのがお定まりだったこの役をうらぶれた浪人者の拵えで演じられました。黒羽二重の小袖に朱塗りの鞘、破れ傘を手に持っての登場です。鉄砲で撃たれたその刹那、口から吐き出された真っ赤な血汐が白い太ももにしたたり落ちる。かっと見開いた目の鋭さ、生への執着の凄まじさ、見事なもんです。わたしなんかの太刀打ちできる相手じゃありません。……神様は不公平ですねえ。この世に才能のある者と無い者を同時にお作りになった。

由紀子　……。

グッド　でもいまでは、あのとき病に倒れてよかったんじゃないかと思ってます。もし舞台に立ってたら、のちのちなんて言われてたか……。

由紀子　そんなことないわ。そんな悲しいこと言わないで。グッドさんが演じたってそれはそれでちゃんと評価されてたわよ。絶対そうよ。

グッド　ありがとうございます。だけど、わたしの一生はもう終わってしまいました。もう一度演じてみたくてもどうすることも出来ません。だけど、あなたにはあと二週間残ってる。それもあなたが主役の大舞台です。わたしのためにも頑張ってください。

由紀子　（グッドを見つめ、しっかりとした表情で）うん、わかった。

グッド　（笑顔で）じゃあ、明日はちゃんと稽古場に行くんですよ。だいじょうぶ、わたしもちゃんとついてってあげますから。

由紀子　そうだ、グッドさんにも何かあげなきゃ。

グッド　は？

由紀子　クリスマス・プレゼント。

グッド　わ、わたしに？

由紀子　あ、そうだ、ちょっと待ってて。

グッド　由紀子さん、わたしはそんな……。

奥へ引っ込む由紀子。そわそわ落ち着かないグッド。通路口から顔を出す由紀子。後ろ手に何かを隠して持っている。

由紀子　こんなもので悪いんだけど、でも、わたしが一番大切にしてるものなの。

グッド　そ、そんな大切なものなんていただけませんよ。

由紀子　ううん、どうしても受け取って欲しいの。……はい、これ。

古い絵本を差し出す由紀子。

グッド　（受け取って）これは？

由紀子　アンデルセンの『人魚姫』よ。

グッド　なんですか、それ？

由紀子　童話よ。

グッド　どうわ？

由紀子　海の妖精の人魚姫が、人間の王子にかなわぬ恋をするお話。もう古くてボロボロになっちゃったけど。

グッド　妖精の人魚姫が、人間の王子に……。

由紀子　夢をつかみたい、夢を手に入れたいと思って努力するのに、けっきょくそれは実現しない夢で終わるの。なんだか、人魚姫の境遇が自分のことのように思えてね。この本だけはずっと手放せなかったの。

グッド　ほんとにいいんですか、そんな大切なものを。

由紀子　是非、読んでみて。

グッド　じゃあ、ありがたくいただきます。あっ……。

由紀子　なあに？

グッド　もし、よかったら、これ読んでみてもらえませんか？

由紀子　わたしが？

グッド　聞いてみたいな、聞かせてください。

由紀子　だめよ、下手だから。

グッド　だって、あなた女優さんでしょ。

由紀子　台詞と朗読は違うじゃない。

グッド　お願いしますよ。（絵本を差し出して）ねっ。

由紀子　（観念して）……じゃあ、読むわ。でも、ほんとに下手よ。

絵本を受け取ろうとする由紀子。そのときタイミング悪く電話が鳴る。

グッド　あっ、もしかしたら彼かもしれませんよ。（鞄の中に絵本を仕舞いながら）いいですね、絶対喧嘩しちゃだめですよ。

由紀子　ええ。（受話器を取って）はい、森田です。……あ、わたしです。うん、だいじょうぶ、ちょっと神経質になってたみたい。

どうやら電話は雄二からのようである。なんとなく寂しそうなグッド。由紀子の後ろ姿をじっと見つめている。

由紀子　明日からちゃんと出ます。だいじょうぶ、だいじょうぶ、だいじょうぶだから。（爆発して）だいじょうぶだって言ってるでしょ！　もう、そういうとこ昔と同じね。昔とおんなじだって言ってるの、その高圧的な態度。……そうね、あなたが正しいん

じゃない。だから、あなたの思うようにやればいいのよ。だけど、わたしは遠慮するわ。……そう、下りるの。もうやめる。絶対やめる！

グッド　（あっけに取られて）ちょっと待ってくださいよ。そういう言い方じゃ喧嘩になっちゃうでしょ。

由紀子　もうなってるわよ。（受話器に）えっ？　やめる気になってるって言ってるの！　勝手にすれば？　そうすればいいじゃない！

グッド　どうするっていうんですか？

由紀子　ここに来るって。

グッド　これから？

由紀子　いま駅前だって。

グッド　じゃあ、すぐ来るんだ。

由紀子　来るんじゃない？

ドアチャイムの音。

グッド　来た！

由紀子　早いな。

グッド　いいですか、絶対喧嘩しちゃだめですよ。約束してください。

由紀子　そんなの約束できない！

すごい剣幕でドアを開ける由紀子。すると、そこに立っていたのは由紀子の弟の友則。ダッフルコートに大きなショルダーバッグを肩から斜めにかけている。

友　則　（由紀子から目をそらして）あ、ねえちゃん元気？

由紀子　友則！　どうしたの大晦日なんかに、また田舎から出てきたの？

友　則　（鸚鵡返しで）また田舎から出てきたの？

由紀子　何度も言ってるでしょ。どうして来るなら来るって、前もって連絡してこないの？

友　則　手紙出した。

由紀子　届いてないわよ、いつ出したの？

友　則　きょう。

由紀子　もおっ。

勝手に上がってくる友則。グッドを見つけて、

友　則　あ、どうも。

グッド　あ、どうも。

思わず挨拶を返してギクリとするグッド。驚いて顔を見合せるグッ

ドと由紀子。一緒に部屋の隅に駆け寄って友則を凝視する。友則はつたないしぐさでコートを脱ぎ、それを異常に丁寧に折りたたむ。そして、ソファに腰かけるとショルダーバッグからゴマの煎餅を出して食べ始める。彼の仕種、反応には自閉症の症状が顕著である。

グッド　ゆ、由紀子さん！

由紀子　ど、どうして？　わたししか見えないんじゃなかったの？

グッド　い、いえ、ごく稀に霊感の鋭い人間には見えることがあるんです。

由紀子　こんなにボーッとしてるのに？

グッド　見た目は関係ないんです。

パリパリッと煎餅を頬張る友則。

由紀子　（こわごわと）友則。

友　則　（にっこり笑って）なに？

由紀子　あんた、ほんとにこの人のことが見えるの？

友　則　（再び鸚鵡返しで）見えるの？

由紀子　ちょっとどうなの？　見えるの見えないの？

友　則　見えるよ。

由紀子　（グッドに）ねえ、どうするの！
グッド　どうするって、どうしましょうか。
ドアチャイムが鳴る。
由紀子　はい！（グッドに）どうしようこっちも来ちゃった。
グッド　とにかく、こういう緊急事態ですからね、あちらには適当にあやまって帰ってい
ただきましょう。
由紀子　あやまる？　なんでわたしがあやまんなきゃいけないの？
乱暴に何度も何度も鳴るドアチャイム。
グッド　ほら、怒ってる、ドアチャイムが怒ってる。
由紀子　わたし絶対あやまんないから。
グッド　もおっ、そういう聞き分けの無いこと言わないの。
ドアへ走るグッド。
グッド　ねっ、形だけ、形だけでいいから。あやまるフリでいいんだから。いいですか、
開けますよ、はいっ！
ドアを開けるグッド。勢い込んで飛び込んでくる雄二。
雄　二　（大きな声で怒鳴る）どういうつもりだ！

雄二の声におびえる友則。ひるむ雄二。

由紀子　（友則をかばいながら）紹介するわ、弟の友則。

友　則　（鸚鵡返しで）紹介するわ、弟の友則。

雄　二　（友則に）どうも。

由紀子の腕を掴んで部屋の隅に連れていく雄二。

雄　二　どういうつもりだ。

由紀子　どういうつもりって？

雄　二　ほんとに下りるのか？

由紀子　そのつもりだけど。

グッド　違うでしょ、ちょっと感情的になってただけですよね。ほんとは下りるつもりなんかないんでしょ？

由紀子　（グッドに）ほんとに下りるの、もう決めたの！

雄　二　一回引き受けといて、俺と意見が食い違ったくらいであっさり下りるのか？

由紀子　それだけじゃないわ。

雄　二　じゃあ、なんなんだよ。

由紀子　あなたのことが嫌いなの。

雄　二　俺のことが嫌いで下りるのか？　そんなことが理由なのか？　それじゃガキの喧嘩だよ。よくそれでプロの看板出してるな。

由紀子　なによ偉そうに。わたしはプロよ、女優の仕事だけでちゃんと食べてるんだから。

雄　二　プロって言ったって、テレビドラマのちょい役じゃないか。

由紀子　ちょい役ばっかりじゃないわよ。こないだだってテレビコマーシャルでちゃんと主役やって来たんだから。

雄　二　ナスビの着ぐるみの中から手足出して踊ってるのが、ちゃんとした役なのか！

由紀子　そうよ、悪い？　あんなにチャーミングなナスビわたしだから演じられるのよ。

グッド　いまのはあなたの方が正しい！　ナスビだって山賊だって、その役に愛情注いでやることが大事なんです。

由紀子　（グッドに）そうよね！　（雄二に）だいたい、わたしがどういう仕事してるのかろくに知りもしないで、わかったようなこと言わないでよ！

雄　二　全部知ってるんだ！

一瞬、唖然とする由紀子とグッド。

由紀子　ぜ、全部知ってるって？

雄　二　全部見てるんだ。お前が出たドラマ。

由紀子　うそ……。

雄　二　嘘じゃない。この五年間で八十七本。題名も内容もくだらんからいちいち覚えてないけど、お前の芝居だけはちゃんと見て来たんだ。

由紀子　……。

雄　二　よかったのは二本だけだ。三年くらい前の刑事ドラマで、殺された男の恋人役やったことがあったろ。死んだ男のそばで刑事に向かって泣き叫ぶとこ、あそこはよかった。それと、今年の夏にやった不倫もので主人公の浮気の相手役な、あれもいい。あとはだめだ、俺は認めない。

由紀子　な、なによ偉そうに。（勢いがない）

雄　二　俺が今回お前に電話したのは、お前の仕事見て、お前のこと認めたからだ。プロの女優なら、引き受けた仕事を途中で放り出したりするな。

グッド　いまのは、この人の方が正しいです。

由紀子　（うなだれて）……ごめんなさい。

間。

由紀子　（顔を上げて）ちゃんと出ます。

雄　二　……そうか、ありがとう。

由紀子　だって、最後の舞台だから。

グッド　（不用意な言葉に驚いて）ゆ、由紀子さん！

友　則　姉ちゃん、女優やめるの？

由紀子　えっ？　ああっ！

グッド　ちょっとまずいですよ！

友　則　（グッドに）何がまずいんですか？

雄　二　（友則に）き、君、誰と話してるんだい？

友　則　（グッドを指して）この人。

グッド　ま、まずい！

友　則　（楽しそうに）ま、まずい！

雄　二　（恐怖に凍りつき）い、いったい、何がまずいんだ！

パニックになって部屋の両サイドに避難するグッドと雄二。

友　則　（楽しそうに）い、いったい、何がまずいんだ！

由紀子　（友則の口を手で塞ぎ大声で）まずい演技よ！

由紀子に注目するグッドと雄二。

由紀子　今度の舞台、もしまずい演技だったら女優やめるって意味。

ドアチャイムが鳴る。

由紀子　友則、ちょっと出て。

友　則　うん、ちょっと出る。

立ち上がって玄関へ向かう友則。

雄　二　そうか、いい心がけだよ。じゃあ、明日から今日みたいなことはないんだな。

グッド　頑張って。

ドアを開ける友則。

由紀子　まかしといて、だってこの役はわたしの役なんだから。

真理子　わたしの役よ！

ドアの向こうから突風と共に姿を現す真理子の幽霊。駆けめぐる閃光。轟音。一瞬のうちに戦慄に包まれる部屋の中。

由紀子　あああああああああっ！

あわてて由紀子の口をふさぐグッド。

グッド　（由紀子をかばいながら）やっぱり成仏してなかったんですね！

真理子　当たり前よ。あの役を由紀子に渡して、のんきにあの世になんか行ってらんないわよ。

グッド　だって、もともとダブルキャストだったんでしょ？　彼女にも権利はあるはずじゃないですか。

バタンと威勢良く閉まるドア。全員が一斉に注目する。みんなに見られていることに気づいて恥ずかしそうに目をそらす友則。

真理子　（憮然と）でも舞台に立ったのはわたしよ。由紀子は権利を放棄したんだから。

由紀子　ちょ、ちょっと待って。

グッド　だいじょうぶですか？

由紀子　だいじょうぶ、幽霊だと思うから恐いのよ。真理子だと思えば恐くないわ。それにわたしにはこれがあるから。（グッドに貰った印籠を見せる）

真理子の背後に近づきいきなり真理子の髪の毛を引っ張る友則。

真理子　（驚愕）おおっ！　な、何すんのよ！（友則を威嚇する）ギャアオオオッ！

楽しそうに耳をふさぎ、真理子から離れてソファに腰かける友則。

由紀子　と、友則。

友　則　なに？

由紀子　あんた、わかってるの？　幽霊なのよ、これ。

友　則　わかってるよ。

由紀子　あんた全然驚かないのね。

友　則　驚いてるよ。

由紀子　それで？　あんた幽霊見てそれくらいのリアクションしかないの？

グッド　感情表現に乏しいタイプなんですね。

真理子　（ムッとして一喝）ちょっと！

　　驚いて真理子を見る由紀子とグッド。

真理子　なによ、さっきから人のこと幽霊、幽霊って、失礼ね！（甘えた口調で）もう、雄二なんとか言って、（雄二の方に振り返り）……なにしてるの？

雄　二　（腰が抜けてその場にへたり込んでいた）い、いや、腰が、ちょっと。

真理子　えーっ、どうしたの、だいじょうぶ？

　　急いで雄二に近づく真理子。

雄　二　ああっ！　ああっ！　ああっ！

　　驚いてあとじさる雄二。真理子も驚いて立ち止まる。

真理子　ど、どうしたの？

雄　二　来るなっ。来るなっ。お、俺、ほかに恐いものないんだけど、幽霊だけはだめなんだ。

真理子　ひどい、幽霊じゃないわ。わたし真理子よ。（さらに近づく）

雄　二　（さらに驚いて）ちょっ、ちょっ、ちょっ、心臓が、心臓が止まる！

絶句して息絶える雄二。

真理子　ええーっ、だいじょうぶっ？

雄二の肩を揺さぶる真理子。

真理子　雄二、しっかりして！　しっかりして！

雄　二　（蘇生して、真理子の顔がそばにあることで再び驚く）あああああっ、よ、寄るな！　寄るなっ！　寄るなっ！

真理子　ひどい、たった一週間なのに。たった一週間でこの態度？　それが七年間連れ添った女房に対する仕打ちなの？　じゃあ、あなたにとって、わたしという存在はなんだったの？

雄　二　（一オクターブ高い声で）そ、そういう問題じゃないだろ！

真理子　そういう問題よ。それが一番大事な問題だわ。

由紀子　真理子。

真理子（キッとして）なによっ。

由紀子　お願い、わたしに演じさせて。

真理子　……。

由紀子　確かに一度は放棄した役だけど、今度は、今度だけはちゃんとやりたいの。

真理子　だめ！

由紀子　どうして？

真理子　どうして？　あんたったら相変わらずね。五年前とおんなじだわ。そうやってわたしから大事なものを全部奪ってっちゃうんだから。

由紀子　わたし、そんな。

真理子　そんな覚えはないっていうの？

由紀子　ど、どういうこと？

真理子　五千円よ！

由紀子　五千円？　なにそれ？

真理子　こんなこと死んでも言いたくなかったけど、わたしあんたに五千円貸してあげたままなのよ！

由紀子　え？

真理子　覚えてないの？　劇団の研究所に入ったばかりのころ、あんたに五千円貸してあげたじゃない、覚えてないの？

由紀子　（突然思い出して）ああっ！

真理子　あんたったら、わたしに抱きついて泣いて感激してたじゃない。わたしも思わずもらい泣きしちゃったわよ。それがなによ、わたしだって生活苦しかったんだから。なのにいつまでたっても返してくれなかったじゃない。

由紀子　すっかり忘れてた。だったら言ってくれればいいのに。

真理子　言えないわよ。あんなふうに百万円借りたみたいに大げさに感激されたあとで、「五千円返して」なんて、あんまりいじましくて言い出せないわよ。

由紀子　ほんとにごめんなさい、あっ、じゃあ、いますぐ……。

チェストの引き出しの中の財布を取りに行こうとする由紀子。

真理子　（カッとして）ちょっとおっ、やめて！

由紀子　え？

真理子　いまさら五千円返してもらったってしかたないでしょ！

由紀子　（真理子をまじまじと見て）あ、ああ、そうか。

真理子　わたしはね、あんたのそういう誠実ぶったところが嫌いなの、ムカムカするの。いったいどんな手を使ったら、雄二があんなふうに骨抜きになっちゃうのかしらねえ。

由紀子　……。

真理子　本番の一週間前に失踪しちゃった無責任な三流女優の出てるドラマをせっせと録画して、わたしに隠れて真夜中こっそり見てる男っていったいなに？　アダルトビデオでも見ててくれた方がまだましだったわ。

雄　二　お前、知ってたのか。

真理子　気がつかないわけないじゃない。由紀子の出てるとこだけ集めて編集した、スペシャルバージョンがあることだってちゃんと知ってるんだから。

雄　二　……。

友　則　ねえちゃん。

由紀子　な、なあに？

友　則　（真理子を指して）この人、いじわるだね。

由紀子　（あわてて）と、友則、黙ってなさい。

真理子　（顔色を変えて）どうせ。

由紀子　ごめんなさい。この子、よくわからないで……、

真理子　どうせ、わたしはシンデレラになり損ねた意地悪な姉よ。

由紀子　真理子。

真理子　（由紀子の側へ行って猫なで声で）王子様の気に入るように、足の指まで切り落

としてガラスの靴に突っ込んだのに。血のにじんだ靴を眺めながら冷ややかな目で王子は言うの、お前はシンデレラじゃないって。だけど、あんたなんかには渡さない。この役も雄二も、お前には絶対に渡さない！

突然、由紀子の髪をつかんで振り回す。悲鳴をあげる由紀子。狂ったように笑う真理子。と、目の前の宙に何かを見つけ、由紀子から手を離して宙をつかむ真理子。それがまるでガラスの靴であるかのようにいとおしそうに抱きしめる。

真理子　そうよ、この靴はずっとわたしだけのものだったの。

かすかな轟音。かすかな風音。手の中に靴がないことに気づく真理子。虚しく空をつかむが、何も得られぬことを知って絶望する。

真理子　死にたくなかった。絶対死にたくなかった。わたしが死んだら、きっとあなたがガラスの靴を奪いにやってくる。そんなの嫌、シンデレラはわたしよ！

突風。大地を揺るがすような轟音。

雄　二　真理子！

真理子　そうよ、シンデレラはわたし。足を切り落とすのはあなたの方よ。あなたがガラスの靴を真っ赤な血で染めるのよ！

衝撃音。真っ赤に染まる部屋の中。

由紀子　きゃあああっ！

グッド　由紀子さん！

雄　二　やめろ真理子！

必死に印籠を突き出す由紀子。

グッド　由紀子さん、なにやってるんですか、水戸黄門じゃないんだから。

由紀子　グッドさん、なんとかして。

グッド　そんなこと言ったって、わたしはただの死神ですよ。

両手を突き出して由紀子に近づいて行く真理子。

真理子　シンデレラはわたしよーっ！

雄　二　真理子やめろ、やめてくれ！

電話が鳴る。

友　則　ねえちゃん電話。

由紀子　（聞こえない）いやーっ、助けてえーっ！

受話器を取る友則。

グッド　くそおっ、くるなっ、くるなっ！

真理子　（由紀子に迫って）由紀子、覚悟しなさい、ヒヒヒヒヒッ。

由紀子危うし、と、そのとき、

友　則　劇団が公演中止！　公演が中止だって！

一瞬にして元通りになる部屋の中。全員ハッとして友則の方を見る。

由紀子だけがその変化に気づかない。

由紀子　そんなことどうだっていいわよ！

静寂。

由紀子　え、なにがどうなったの？

雄　二　君、ちょっと電話貸して。（腰が抜けているのを忘れて立ち上がり、友則から受話器をひったくる）もしもし坂本です。いったいどういうことですか。どうしてそんなことになったんですか。はい、はい、はい、そんなこと納得出来ませんね僕は。

由紀子　（グッドに）ねえ、なんなのいったい？

グッド　公演が中止になったみたいです。

由紀子　そんな……。

雄　二　わかりました、みなさんまだ劇団にいらっしゃるんですね。すぐそちらに行きます。僕が納得いくように説明してください。（電話を切る。みんなの方へ振り返って）

これから劇団にもどる。いいか、このままの状態で待っててくれ、じゃあ！

ものすごい勢いで、靴も履かずに走って出ていく雄二。

真理子　（我に返って）公演中止なんか絶対だめよ。それじゃ、わたしの立場はどうなるの。由紀子に止めを刺すのはわたしなんだから。雄二待って、わたしも行く。劇団の連中に邪魔されてなるもんですか。

雄二を追って出ていく真理子。が、すぐに戻ってきて雄二の靴を抱え、

真理子　雄二ったら靴もはかないで……。（グッドたちの視線に気づいて威嚇する）ギャオオオッ！

雄二の靴を抱えて風のように走り去る真理子。

由紀子　……けっきょく、こういう結末なのね。

グッド　由紀子さん。

由紀子　いいわ、連れてって。もうこれ以上この世にいる理由がなくなっちゃったわ。

グッド　……。

由紀子　わたしの人生って何だったのかなあ。グッドさんの言う通りよ、いい思い出なんかなかったわ。辛かったり苦しかったり、そんな思い出ばっかり。

グッド　（急いで鞄から書類を取り出して）そんなことないですよ。いい思い出たくさんありますよ。そんなことないですよ。（懸命に書類をめくる）

由紀子　いいのもう、もう終わり、終わりにしましょう。ここらへんで幕引いちゃおう。ねえ、連れてって。

首を横に振るグッド。

由紀子　どうして？　だってグッドさん、そのために来たんでしょ？

グッド　よくないです。こんな気持ちで死ぬなんてよくないです。もっとなんて言うか、あったかい気持ちが胸いっぱいに詰まってる、そういう気持ちで死んでいけないなんて絶対よくないです。

由紀子　いいの、わたしにはそんな満ち足りた気持ちで死んでいく資格なんかないんだから。

グッド　由紀子さん。

由紀子　赤ちゃんがいたの。……おなかの中に、わたしと雄二の赤ちゃんが。

痛ましそうにうなだれるグッド。

グッド　知ってます。

由紀子　そうよね、その書類に全部書いてあるんでしょう？　だけどね、わたしどうして

も舞台に立ちたかったの。だって初めての主役だったんだから。雄二がせっかくわたしのために書いてくれた作品だったんだから。子供なんかいらない。子供なんか邪魔なだけ。……だからクリスマス・イヴの夜に産婦人科のドアを叩いたの。

グッド　由紀子さん。

由紀子　でもね、そう割り切って手術したはずなのに、おなかの中が空っぽになった途端に、心の中の大切なものも一緒に無くなってしまったの。舞台への情熱も、雄二への気持ちも、生きて行く気力も何もかも。そしてね、それ以来からだの奥の方から、ときどき小さな声が聞こえてくるの。「お母さん、お母さん、ここだよ」「お母さん、お母さん、さびしいよ」（ハッとして）……そうか、これは信号なんだわ。神様が早く子供のそばに行ってやりなさいっていう信号だったんだわ。

テーブルの上に印籠を置き、何かに取り憑かれたように立ち上がる

由紀子。

由紀子　あの子のとこに行かなきゃ。行ってごめんねって言わなきゃ……。

そのまま奥へ行こうとする。

グッド　（心配して）どこへ行くんですか？

立ち止まり、振り返ってにっこり微笑む由紀子。

由紀子　だって、あの世に着替えなんか持って行けないんでしょ？　一番気に入った洋服に着替えてくるわ。

再び奥へ行こうとする由紀子。と、突然立ち上がる友則。

友　則　（叫ぶ）ねえちゃん！

立ち止まる由紀子。

友　則　（下を向いてぶつぶつと）ねえちゃん、いい女優だと思う。絶対才能あるよ。さっきの人が、ねえちゃんのドラマ八十七本見たって言ってたけど、ほんとは八十八本あるんだよ、ねえちゃんが出たの。田舎でちゃんと数えてたんだから。それに、あの人二本しかいいのがないって言ってたけど、僕は全部よかったと思うよ、ほんとだよ。全部よかったよ！　全部よかったよ！　全部よかったよ！

突然パニックに陥る友則。興奮して金切り声を上げる。たまらない気持ちで友則を抱きしめる由紀子。

由紀子　だいじょうぶ、だいじょうぶよ。友則、だいじょうぶだから！

徐々に落ち着いて静かになる友則。

由紀子　（友則を見つめて）……ごめんね。

奥へ消える由紀子。見送る友則とグッド。

友　則　ねえちゃん、死んじゃうの？

グッド　ええ、寿命なんです。

友　則　（繰り返す）ええ、寿命なんです。ええ、寿命なんです。

テーブルの印籠を手に取るグッド。

グッド　わたしの力じゃ、もうこれ以上は。

友　則　なんで死んじゃうの？　なんでおねえちゃん死んじゃうの？

ハッとして凍りつくグッド。

グッド　しまった！

友　則　……。

グッド　死因は自殺なんですよ、由紀子さん！

奥へ走るグッド。暗転。

7

黄泉の国へ通じる空間。揺れる光。漂う不可思議な音。舞台中央前に肩を落とし、憔悴したグッドが立っている。その手に握られている印籠。後ろにうごめいている大勢の死神たち。

グッド　よくないです。こんな気持ちで死ぬなんてよくないです。

死神たち　タマシイは手に入った――――た――――た――――。

死神たちの声がこだまする。

グッド　絶対によくないです。

死神たち　なにをしているのだ――――だ――――だ――――。

グッド　……。

死神たち　さあ、こちらに渡せ――――せ――――せ――――。

グッド　ちょっと待ってください。こんな中途半端な死に方じゃ、これじゃあんまりです。

沈黙する死神たち。

グッド　あなたに、ひとつでいいんだ。いい思い出があれば。あったかい気持ちになって、自信と勇気がわいてくるような……。そうだ！　いい思い出を作るんだ。五年前のあなたに、とびっきりのいい思い出を。五年前に行こう！

鏡の奥に時を司る魔女が現れる。

老　婆　いいだろう行っといで！　ただし、条件どおりお前のその声はもらうよ！

グッド　差し上げます。それで五年前に行けるんですね。

老　婆　行けるともさ。それにしても間尺にあわぬ話よのう。お前の望みの見返りに待っているのは、はたしてどのように恐ろしい罰であろうか。ほんとうによいのじゃな？

グッド　かまいません。

老　婆　そうか、では行くがよい。五年の時を逆上るのじゃ！　ヒーッ、ヒッヒッヒッ！

老婆の姿が消える。

グッド　よおし、五年前に行くぞおっ！

騒ぎだす死神たち。口々に叫ぶ。

死神たち　規則違反だ！　秩序を乱す者だ！　制裁を！　彼に厳罰を！

轟音。必死に走るグッド。後を追う死神たち。懸命に振り切るグッド。息を切らし必死に五年前へ飛ぶ。

8

病院前の路上。音もなく降りしきる雪。上手側に病院の玄関。下手側には板塀、ゴミ箱。遠くの商店街からジングルベルが聞こえてくる。病院の玄関ドアを開けて五年前の由紀子が出てくる。

看護婦の声（玄関の奥から）おだいじに。

病院の灯が消える。青白い顔の由紀子。おぼつかない足取りで雪の上へ歩き出す。苦しそうな表情。舞台中央前まで歩いて来るが、力なくその場にしゃがみこんでしまう。板塀の向こうにボロをまとった浮浪者が現れる。由紀子を見つける浮浪者。ハッとして彼女を見る。足早に由紀子に近づき、自分のオーバーをかけてやる。

由紀子　あ……。

浮浪者に気づいて、少しおびえたようにあとじさる由紀子。浮浪者、実はボロボロになったグッドである。

グッド　ウイ、ア……。

口がきけないグッド。そのことにグッド自身が衝撃を受ける。由紀子もすぐにそれと気づく。

由紀子　あなた……。

マフラーもはずして由紀子の首に巻いてやるグッド。

由紀子　ありがとう、とってもあったかいわ。

グッドは、寒いから早く家へ帰った方がいいと懸命に説明する。

グッド　アッムッイッアッアッ、ウィイッエッアッエッアッオッアッイッイッ。

しかし、その思いは言葉になって由紀子には伝わらない。

由紀子　え、なに？

グッド　（さらに懸命に）ウッイッ、ウッイッ、ウッイッ。

由紀子　……家？

大きくうなずくグッド。

由紀子　家に帰れって言うの？

満面の笑みでうなずくグッド。

由紀子　……でも、家に帰ったってここよりもっと寒いわ。もうどうでもいいの。このまま死んだってかまわないわ。

グッド　（顔を真っ赤にして怒る）オッ！　オッ！　オッ！

由紀子　（その剣幕に驚いて）ごめんなさい。冗談よ、冗談だからそんなに怒らないで。

安心するグッド。微笑む由紀子。

由紀子　じゃあ、もう行くわ。ちょっと楽になってきたから。マフラーありがとう。あたたかかった。あったかい気持ちになった。（グッドの首にマフラーを巻いてやる）なにかお礼したいんだけど、……でも、いまわたしなんにも持ってないの。ほんとになにもないわ。

途方に暮れる由紀子。痛ましい思いで由紀子を見つめているグッド。が、突然思い出して自分のボロバッグをさぐり、中から古い絵本を取り出して由紀子に見せる。

由紀子　絵本？　……どうするの？

グッド　オッンエッ、オッンエッ。

由紀子　な、なに？

絵本を広げたり、自分の耳に手をやったりして、読んで欲しいということをからだじゅうで説明するグッド。

由紀子　よ、読むの？

目を輝かせてうなずくグッド。

由紀子　その絵本を？　わたしが？

グッド　ウッ、ウッ、ウッ。

何度も何度もうなずくグッド。

由紀子　だめよ下手だから、ほんとに下手なの。

強引に絵本を押しつけるグッド。

由紀子　（表紙が目に入る）人魚姫……。おじさん、こんなの好きなの？

恥ずかしそうに微笑むグッド。

由紀子　わたしもこのお話大好きよ。……じゃあ、他になんにも出来ないから。

ページを開く由紀子。

由紀子　……人魚姫が海の上に顔を出したとき、ちょうどお日さまが沈みました。風はおだやかで空気はすがすがしく、海の面は鏡のように静かでした。向こうの方に三本マストの大きな船が浮かんでいました。人魚姫は船室のすぐそばまで泳いで行きました。そして若い王子を一目見て、たちまち恋のとりこになってしまいました。ところが、急に波は山のように高くなり、遠くの方で稲妻がピカピカ光って荒れ狂う嵐がやって来ました。船はたちまち真っ二つに割れて、海の底へ沈んで行きました。人魚姫

は自分の身の危険も忘れて夢中で王子を助け出しました。

どこからか砂浜に打ち寄せる波の音が聞こえてくる。

由紀子　明け方近く嵐は過ぎ去りました。人魚姫は王子を抱いて小さな入り江に泳いで来ました。砂の上に王子を寝かせたとき大きな白い建物の中で鐘が鳴りました。

遠くで教会の鐘の音。

由紀子　そして、大勢の若い娘たちが庭から出て来ました。人魚姫が大きな岩影から見ていると、まもなくひとりの若い娘が歩いて来ました。娘は王子を見るとたいそうびっくりして他の人達を呼んで来ました。王子はやっと気がついてまわりにいる人達に微笑みかけました。けれども命を助けてくれた人魚姫の方へは微笑んでもくれません。人魚姫はたいそう悲しくなりました。

波の音が消える。黙ったままうつむいてしまう由紀子。

グッド　（心配して）アッ、ウッ、アッ。

由紀子　だいじょうぶ、なんか涙が出てきちゃった。子供のころから知ってるお話なのにねえ、なんでこんなに悲しいんだろう。なんでこんなに人魚姫の気持ちがわかるんだろう。

気を取り直して絵本を読み始める由紀子。

由紀子　……人魚姫はからだにはげしい痛みを感じました。目を上げてみれば、すぐ目の前にあの王子が立っています。王子は黒い目でじっと人魚姫を見つめていました。お姫様は思わずその目を伏せました。するとどうでしょう、魚のしっぽはいつのまにか消えてしまって、可愛らしい人間の娘しか持っていないような、世にも美しい小さな白い足が生えているではありませんか。「あなたはどういう方ですか？　どうしてここに来たのですか？」と王子はたずねました。人魚姫はいかにもやさしそうに、でもたいそう悲しげに王子を見つめました。なぜって、お姫様は口をきくことが出来ないのですから。王子は人魚姫に、これからはいつも自分のそばにいるようにと言いました。一日ごとに王子は人魚姫が好きになりました。ところがそのうちに、王子はお隣の国の美しい王女を妃に迎えるという噂が立ちました。「僕がその王女を好きになるはずがない。だって僕が好きなのは、僕を浜辺で助けてくれた娘さんなのだから。僕がいつかお嫁さんを選ばなければならないとしたら、いっそのことお前を選ぶよ」

――あくる朝、隣の国の王女がやって来ました。王子は王女を一目見た途端、大きな声で叫んだのです。

衝撃音。鏡の奥に五年前の雄二と真理子が現れる。

雄二　（真理子に）君だよ！　僕が捜してたのは君だったんだ！（由紀子の方へゆっく

り振り向いて）由紀子、お前も俺の幸せをよろこんでくれるだろう。

雄二たちの姿が闇に消える。いつのまにか由紀子の手には鋭く尖ったナイフが握られている。ゆっくりと立ち上がる由紀子。

由紀子　人魚姫は、むらさき色の垂れ幕を取りのけました。中では美しい花嫁が王子の胸に頭をもたせて眠っています。人魚姫は身をかがめて王子の美しいひたいにキスをしました。夜明けの空が赤く染まって、だんだん明るくなってきました。もう時間がありません。人魚姫は鋭いナイフをじっと見つめました。それからまた王子に目を向けました。王子は夢の中で花嫁の名を呼びました。人魚姫の手の中でナイフが震えました！

高々とナイフを振りかざす由紀子。が、すぐに切っ先を自分の方へ向け、胸を射し貫こうとする。間一髪、由紀子の手をぐっとつかみナイフを奪い取るグッド。力尽きてその場にしゃがみこむ由紀子。そして静かに泣き始める。急いでボロバッグの中から印籠を取り出すグッド。泣いている由紀子の手を取って、ナイフの代わりにそっと印籠をつかませる。

由紀子　これ、なに？

グッド　イッ、イッ、イッ。

由紀子　わかるわ、印籠ね。

大きくうなずくグッド。由紀子の手を握って押しやるようにする。

由紀子　くれるの？　わたしに？

グッド　（蓋を開けるように身振り手振りで説明する）ウッアッ、ウッアッ。

由紀子　開けるの？（こわごわと印籠の蓋を開けてみる）……からっぽよ。

にっこり微笑んで首を横に振るグッド。怪訝な表情の由紀子。グッドは由紀子の目をじっと見つめながら、声にならない声で何かを喋ろうとする。

グッド　イッ、イッ、イウッ。

由紀子　えっ？

グッド　（懸命に）イウッ、イウッ、イウッ。

ひたいに汗がにじむグッド。息を詰めて聞いている由紀子。

グッド　イウッイッ、イウッイッ。

由紀子　なに？

勇気がいっぱい詰まっているということを身振り手振りで訴えるグ

ッド。しかし、由紀子には伝わらない。

グッド　イウイッ、イウイッ、イウイッ。

由紀子　うん。

グッド　イウッキッ！

突然、『勇気』という言葉が由紀子の中で弾ける。

由紀子　わかったわ！

グッドを見つめる由紀子。

由紀子　……勇気が、いっぱい詰まってるのね、この中に。

にっこり微笑む由紀子。その途端に涙がこぼれ落ちる。そうだよというように何度も何度もうなずくグッド。

由紀子　わたし、こんな素敵なクリスマス・プレゼントもらったの、はじめて。（グッドに抱きついていく）ありがとう。

雪の上で抱き合うグッドと由紀子。二人の上に冷たい雪が降りそそぐ。けれども、二人のまわりだけは暖かな光であふれている。暗転。

9

異空間。暗闇。不可思議な音。

死神たちの声　捕まえたぞ！

明かりが点くと、死神たちにはがい締めにされてうなだれているグッドの姿。天上から裁判官の声が聞こえてくる。

裁判官の声　お前に対する処罰が決まった。

グッド　ウッ、アッ！

裁判官の声　お前から、死神の役目を取り上げることになった。

グッド　……。

裁判官の声　お前はもう二度と生まれ変われない。

グッド　……。

裁判官の声　人間にも、獣にも、虫にもな。

グッド　……。

裁判官の声　お前は塵になって消滅するのだ。
死神たち　消滅するのだ。消滅するのだ。消滅するのだ。
死神たちの声がこだまする。
裁判官の声　何か言いたいことがあるか？
うなだれているグッド。
裁判官の声　そうか、喋りたくとも口がきけぬか。
身動きしないグッド。
裁判官の声　それでは、塵になる前に何か望むことがあるか。
ゆっくりと顔を上げるグッド。
裁判官の声　ただひとつだけ、最後の望みを叶えてやろう。
その言葉に目を輝かせるグッド。暗転。

10

由紀子のアパート。再び、今年のクリスマス・イヴ。誰もいない部屋。ドアが開いて由紀子と幸子が入ってくる。

由紀子　さあ、上がって、上がって。

幸　子　おじゃまします。

部屋に上がって明かりを点ける由紀子。

由紀子　ちょっと腰かけて待ってて。

コートを脱ぎ、チェストの上に鞄を置いて通路口に消える由紀子。

ソファに腰かけて所在なげな幸子。

幸　子　（大きなためいきをついて）最低のクリスマス・イヴ。

由紀子　（明るく）お待ちどうさま。

キッチンから出てくる由紀子。手にはワインの瓶と三つのグラス。

彼女はその中のひとつだけをそっとチェストの上に置き、戻ってきて幸子のそばに腰かける。その様子をめざとく見ている幸子。

由紀子　（テーブルにグラスを置きながら）さあ、まずは乾杯といきましょうか。

幸　子　乾杯って、何に乾杯するの？

由紀子　そうねえ……。

幸　子　レストランの奥の個室。壁にはささやかな飾りつけ。テーブルの真ん中には三段重ねのデコレーションケーキ。それぞれの席の前には小さなキャンドルと名前入りのカード。だけど、そこにいるのはあなたとわたしだけ。

由紀子　幸子。

幸　子　やがて次々に運ばれてくるワインにシャンパン。だけどそこにいるのはあなたとわたしだけ。

由紀子　もういいじゃない。

幸　子　そして今、高級レストランから一転して、安アパートのソファに腰かけているみじめなあなたとみっともないわたし。そんな二人の女に乾杯。……うんざりだわ。

黙々とグラスにワインを注ぐ由紀子。

幸　子　ごめんなさい。安アパートは言い過ぎだったわ。それにしても、どうして料理が出てくる前にわたしたちの方が出てこなきゃいけなかったの？

由紀子　あんな広いところで二人きりなんて寂しいじゃない。

幸　子　お金は全部払ってあったのよ。こんなことならみんなの分も、食べて食べて食べ尽くしてやればよかったのよ。

由紀子　みんなの悪口言いながら食べたっておいしくないわ。ねっ、気分を変えて、これ
わたしのとっときのワイン、召し上がれ。
幸　子　（不承々々）いただくわ。
由紀子　乾杯。
乾杯する二人。
由紀子　うん、おいしい。
幸　子　ねえ。
由紀子　なに？
幸　子　（チェストの上のグラスを指して）あのグラスはなに？
由紀子　（ちょっとうろたえて）ああ、なんでもないの。
幸　子　誰か来る予定でもあるの？　だったらわたし……。
由紀子　ううん、そうじゃないの。習慣でね、いつもひとつ余分に用意しちゃうの。
幸　子　もしかして、亡くなった人のために？
由紀子　（言いよどみながら）うん、まあ、そんなとこ。
立ち上がってキッチンへ行く由紀子。
幸　子　ごめんなさい、立ち入ったこと聞いちゃって。

由紀子　（オフで）ううん、いいのよ、気にしないで。

オレンジジュースの瓶を持って戻ってくる由紀子。チェストの上のグラスに注ぐ。

幸　子　（興味を押さえきれずに）ロマンチックなことしてるのね。

由紀子　単なる習慣よ。

幸　子　昔の男？

由紀子　さあ。

チェストの上に置いてあった印籠を手に取る由紀子。

幸　子　さあって？

由紀子　男だか女だかわかんないの。

幸　子　（勘違いして）そういう種類の人？（居住まいを正して）複雑な事情があるみたいね。だいじょうぶ、わたし、他人のプライバシーには踏み込まない主義だから。

由紀子　ありがと。

幸　子　（印籠を見つけて）なにそれ？

由紀子　ああ、これ？　印籠よ。

幸　子　印籠はわかるわよ。なんでそんなもの持ってるの？

由紀子　うん、まあ、お守りみたいなものかな。

幸　子　お守り？

由紀子　そう、勇気がわいてくる印籠なの。

幸　子　まあ、いいわ。わたし、他人のプライバシーには踏み込まない主義だから。

ドアチャイムが鳴る。

由紀子　あれ、誰だろうこんな時間に。はい。

ドアを開ける由紀子。ドアの外に立っていたのは隣の女。華美なドレスに身をまとい、ガマガエルのような声で笑う。

由紀子　ああ、山口さんだったんですか。

隣の女　ちょっと、いい？

由紀子　あ、はい、どうぞ。

隣の女　悪いんだけど、あれ貸してくれない？

由紀子　あれ？

隣の女　ワインの栓抜き、ぐふふふふっ。

由紀子　ああ、はい。

隣の女　わたし、去年はひとりぼっちだったんだけど、今年はどういうわけだか大勢集ま

っちゃってねえ。準備だけでも大変なのよ、ぐふふふふっ。

由紀子　そうなんですか。

隣の女　ああ、いいのいいの勝手に捜すから、どうせキッチンで……。

勝手に上がろうとして幸子がいることに気づく隣の女。

隣の女　（ドキリとして）あら、お客様？

由紀子　ええ、友達なんです。

隣の女　お友達が来てるの？　今年は？

由紀子　ええ、そうなんです。これからパーティなんです。

隣の女　そ、そう、めずらしいわねお客様なんて、だって、あなたクリスマス・イヴはずっとひとりぼっちだったでしょ。

由紀子　ええ、まあ。

幸　子　あら、そんなことないじゃない。クリスマス・イヴは、いつもわたしたちと一緒だったじゃない。

隣の女　そ、そうなの？

由紀子　ええ、家ではひとりだったんです。でも、外ではパーティしてたんです。

隣の女　してたの？　外では？　パーティを？

異常にうろたえる隣の女。その様子をじっと見つめる由紀子。印籠をギュッと握りしめて、

由紀子　でも、今年は外のパーティ、キャンセルになっちゃって。

隣の女　そ、そう。

由紀子　そうだ、もしよかったら、一緒にパーティやりませんか？

隣の女　（驚いて）え、わたしが？

由紀子　（幸子に）ほら、これで三人になったわ。女が三人集まればもう充分賑やかよ。

幸　子　（うろたえて）そ、そうね、だけど。

由紀子　ああ、この方お隣の山口さん。彼女は野川幸子。わたしの友達なんです。

幸　子　だけど、わたし山口さんとは初めてだし……。

隣の女　わたしは、ただ栓抜きを……。

由紀子　ああ、そうか、山口さんのお宅でもパーティなんですね。

隣の女　え、ええ、まあ、そうなんだけど、でも……。

由紀子　じゃあ、もし、今年に限って誰もこなかったら、そのときはわたしたちとご一緒しませんか？　合併して盛大にやりましょうよ。

幸　子　三人だけでね。

隣の女　ああそう、そうね、そういうのもいいかもね。じゃあ、わたし取りあえず……。
由紀子　ちょっと待ってみて、もし誰もこなかったら是非こちらに来てください。
隣の女　ええ、まあ、考えてみるわ。じゃあ、……ありがとう。
ドアを開けて出ていく隣の女。
幸　子　どうしてあんな人を呼ぶの？　わたし、他人のプライバシーに踏み込まない代わりに、じぶんのプライバシーにも踏み込まれたくない主義なの。
由紀子　彼女ひとりぼっちなのよ。
幸　子　え、だってパーティしてるって。
由紀子　毎年様子を見に来るの。
幸　子　毎年？
由紀子　そして毎年言うの。「わたし去年はひとりぼっちだったけど、今年はどういうわけか大勢集まっちゃって」って。
幸　子　それって……。
由紀子　ほんとは毎年ひとりぼっちだってことでしょ。
幸　子　そういうことになるわね。
由紀子　だから、今年大勢でパーティしておけば、来年はちゃんと人に言えるじゃない。

「去年は大勢だったのよ」って。

幸　子　信じられない。

由紀子　なにが？

幸　子　もしかして、あんたのおばあさんってマザー・テレサ？　でもっておじいさんがガンジーで、祖先に大塩平八郎かなんかがいるっていうそういう血筋？　でなきゃ信じられないわ。どうしてそんなお人好しなことが言えるのか。

由紀子　この印籠をね。

幸　子　それがどうかしたの？

由紀子　五年くらい前に、ある人から貰ったの。

幸　子　……。

由紀子　「これは勇気がいっぱいつまってる印籠なんだ」って。笑っちゃうでしょ。こんな薄汚れたボロボロの印籠の中に『勇気』が詰まってるんだって、その人真面目な顔して言うの。普段なら、そんなもの手に取ったりしなかったと思う。だけど、そのころ色々あってね、……手に取らずにはいられなかったの。ありがたかった。うれしかった。世界中がわたしのことを認めてくれないのに、その人だけがわたしに言ってくれたの。「だいじょうぶ、あなたならきっと出来る！」って。……おかげで立ち直

れたの。もう一回、勇気を出して生きて行こうって思えたの。

幸　子　ふうん。

由紀子　だけど、今でも自分ひとりじゃなにも出来ないの。山口さんのことだって、幸子がそばにいてくれて、印籠がトンと背中を押してくれたから出来たんだと思う。

幸　子　わたしと印籠が共犯者？

由紀子　そうね。

幸　子　ベストフレンドにはなれそうもないわ。

由紀子　ねっ、協力して。

幸　子　（ためいきをついて）しかたないな。

由紀子　ありがと。さあ、じゃあ、ささやかなパーティの用意しなくちゃね、手伝って。

幸　子　わかったわ。

ドアチャイムが鳴る。

由紀子　あら、四人目のお客様かな？

幸　子　ここはもう三人で満席だからね。キッチンに行ってるわ。冷蔵庫見てみる、何か有り合わせで作れるかどうか。

由紀子　お願い。

キッチンへ消える幸子。ドアを開ける由紀子。と、そこに立っているのはデニス・グッド。黒いスーツに黒いネクタイ。黒い鞄を手に持っている。

由紀子　（怪訝そうに）はい、なんですか？

グッド　（うれしそうに）アッ……。

由紀子　ああ、ごめんなさい、クリスマス・イヴなのに大変ですね。でも、いまちょっといそがしくて、悪いけどまた今度にしてもらえますか？

グッド　（うつむいてしまう）……。

由紀子　どうしたんですか？

あわてて、なんでもないというように首を左右に振るグッド。小さく頭を下げてドアを閉める。由紀子、何か引っかかるものがある。

由紀子　あ、ちょっと待って。

ドアを開けるとまだそこに立っていたグッド。グッドを見つめる由紀子。

由紀子　……前に、どこかでお会いしたことありませんか？

顔をこわばらせて首を左右に振るグッド。

由紀子　ごめんなさい、人違いみたい。

由紀子の手に印籠が握られているのを見つけてハッとするグッド。

顔を上げて由紀子をじっと見る。

由紀子　な、なんですか？

グッド　……。

グッドの口が、ゆっくり『ゆ・う・き』と動く。ハッとする由紀子。

心の中で『さようなら』とつぶやいて、急いでドアを閉めて出ていくグッド。

由紀子　ちょっと、ちょっと待って！

急いでドアを開ける由紀子。しかし、もうそこにはグッドの姿はない。すべてが元通りの部屋。ドアを閉めて印籠を見つめる由紀子。

由紀子　いまの人、もしかしたらあのときの……。

不思議な気持ちに包まれる由紀子。電話が鳴る。

由紀子　はい、森田ですけど。（ドキリとして）坂本さん！　……ずいぶんおひさしぶりですね。ええ、元気でやってました。いまさら、どうしてわたしなんかに？　えっ、死んだ？　真理子が！　ええ、ええ、そうだったんですか。ええっ？　それで真理子

の代役をわたしに？　……あの役を。

電話の途中からゆっくりと暗くなっていく部屋の中。しんしんと夜は更けていく。まるで何事もなかったかのように、静かに静かに雪が降りてくる。そして、すっかりサイレント・ナイト。

――おしまい――